APRIL 15, 1922. NO. 8057

The Japanese American News

大正一一年四月十五日（土）第八千五七七號

Published and distributed under Permit (No. 173) authorized by the Act of October 6, 1917, on file at the Post Office of San Francisco, California. By order of the President: A. S. Burleson, Postmaster General.

日米

THE JAPANESE AMERICAN
PUBLISHED DAILY AT
680 ELLIS STREET,
SAN FRANCISCO, CALIFORNIA.
PHONE PROSPECT 285
ENTERED AT S. F. POST OFFICE AS SECOND CLASS MATTER.
K. ABUKI, EDITOR & PROP.
SUBSCRIPTION RATES IN ADVANCE
DAILY.....ONE YEAR..... $11.00
DAILY.....SIX MONTHS..... 6.00
DAILY.....ONE MONTH 1.00
SINGLE COPIES ..... 5 CENTS
BRANCHES
DENVER, FRESNO, LOS ANGELES, NEW YORK, OAKLAND, ODESSA, PORTLAND, SACRAMENTO, STOCKTON, SAN JOSE, SALT LAKE, SEATTLE, VACAVILLE, WATSONVILLE

日米

政界變調

高橋內閣と政友會の採るべき道

高橋內閣の鼎の輕重は最近の政治季節で充分に讀まれた。生き長らへるだけの價値のないものが今日まで續いたと云ふのは畢竟故原敬氏一人の力に依るものであつたことが明白に判つた。高橋子に依つて最も望ましき後繼者が見出されたと考へたのは一時の幻想であつた。高橋子は首相としての試驗に見事落第した。而して今やまた政友會總裁としての試驗に散々の味噌をつけつゝある。是れと同時に原敬氏を失つた政友會の影がまた頓に薄らいで來た。極端に云へば政友會なる大政黨が表面だけでも統一の體面を維持して居るのは要するに高橋內閣なるものが曲りなりにも生存して居る爲めであるとしか思へない。是に於て力ないと云ふ爲めの問題許りではない。假令んば故原敬氏が生きて居ても此運命は早晩政友會を見舞はねばならなかつたのである。一言にして云へば既成政黨の存在價値を世人が疑ふと同時に、又同樣の意味で政黨員自己を疑ひ始めたのである。思ふに既成政黨は形式的に云へば憲政會の今日に及べるは全く既成政黨が當然踏むべき道を辿つて來て居るのだ。政友會も同樣の運命を持たねばならぬものであつたが、原敬と云ふ偉大なる藝式政黨政治家が居り又我黨內閣なるものを維持して居た爲めに辛じて體面を繕ろつて來ることが出來たのだ。從つて高橋內閣が斃るゝ其後繼者が何ものであつても政友會の運命は殆んど同樣に定まるのである。聞く所に依れば政友會では今や猛烈なる內輪揉めが行はれつゝあると云ふ。當然のことである。而して是れは高橋子に統裁力がないと云ふ爲めの問題許りではない。假令んば故原敬氏が生きて居ても此運命は早晩政友會を見舞はねばならなかつたのである。一言にして云へば既成政黨の存在價値を世人が疑ふと同時に、又同樣の意味で政黨員自己を疑ひ始めたのである。思ふに既成政黨は形式的に云へば憲政會の今日に及べるは全く既成政黨が當然踏むべき道を辿つて來て居るのだ。政友會も同樣の運命を持たねばならぬものであつたが、原敬と云ふ偉大なる藝式政黨政治家が居り又我黨內閣なるものを維持して居た爲めに辛じて體面を繕ろつて來ることが出來たのだ。從つて高橋內閣が斃るゝ其後繼者が何ものであつても政友會の運命は殆んど同樣に定まるのである。聞く所に依れば政友會では今や猛烈なる內輪揉めが行はれつゝあると云ふ。當然のことである。而して是れは高橋子に統裁力がないと云ふ爲めの問題許りではない。假令んば故原敬氏が生きて居ても此運命は早晩政友會を見舞はねばならなかつたのである。一言にして云へば既成政黨の存在價値を世人が疑ふと同時に、又同樣の意味で政黨員自己を疑ひ始めたのである。思ふに既成政黨は形式的に云へば憲政會の今日に及べるは全く既成政黨が當然踏むべき道を辿つて來て居るのだ。政友會も同樣の運命を持たねばならぬものであつたが、原敬と云ふ偉大なる藝式政黨政治家が居り又我黨內閣なるものを維持して居た爲めに辛じて體面を繕ろつて來ることが出來たのだ。從つて高橋內閣が斃るゝ其後繼者が何ものであつても政友會の運命は殆んど同樣に定まるのである。聞く所に依れば政友會では今や猛烈なる內輪揉めが行はれつゝあると云ふ。當然のことである。而して是れは高橋子に統裁力がないと云ふ爲めの問題許りではない。假令んば故原敬氏が生きて居ても此運命は早晩政友會を見舞はねばならなかつたのである。一言にして云へば既成政黨の存在價値を世人が疑ふと同時に、又同樣の意味で政黨員自己を疑ひ始めたのである。思ふに既成政黨は形式的に

THE JAPANESE AMERICAN
PUBLISHED DAILY AT
680 ELLIS STREET,
SAN FRANCISCO, CALIFORNIA.
PHONE PROSPECT 285
ENTERED AT S. F. POST OFFICE AS SECOND CLASS MATTER.
K. ABUKI, EDITOR & PROP.
SUBSCRIPTION RATES IN ADVANCE
DAILY.....ONE YEAR..... $11.00
DAILY.....SIX MONTHS..... 6.00
DAILY.....ONE MONTH 1.00
SINGLE COPIES ..... 5 CENTS
BRANCHES
DENVER, FRESNO, LOS ANGELES, NEW YORK, OAKLAND, ODESSA, PORTLAND, SACRAMENTO, STOCKTON, SAN JOSE, SALT LAKE, SEATTLE, VACAVILLE, WATSONVILLE

上其命脈を未だ當然は續けて行くことが出來やう。今の樣子では夫れほど急激な政治的變動が來やうとは考へられない。假令んば普通選擧が直に實現されたにしても所で即到日本の政黨政治が一變するものではないのである。併し年一年と漸進的に變るものは變つて行く、今の所變るものは變わの少しでもして居るのは國民黨だけである。時勢を見るに割合に敏なる政友會もやがては相當の改造を自ら試みるに違ひない。此意味に於て高橋內閣の崩壞は却て政友會に或る新生面を齎らすことになるかも知れない。又是非さうなくてはならぬのである。政友會は憲政會の現狀と單なる政權の問題に許り結びつけて考へてはならぬ。政友會が今後在野黨として考へなければならぬ問題はもつと廣く且つ根本的のものである。原敬氏に依つて代表された舊式の政治的懸引は原敬氏と共に葬り去るべきである。（春舟郎）

歐洲新情勢電報（四月十四日神戸通信）

●四巨頭會議不一致

▽對露問題の意見區々

英（英）バルトー（佛）ジャンザー（伊）ジャスパール（白）四氏は十四日朝露國問題に關し會合したるが結局意見の一致を見るに至らずして物別れとなりたるの風說あり

▲伊太利と英國の對露報告

伊太利委員は英國財政專門委員の起草せる對露報告書は未だ列國政府の承認を經たるものに非ずとの說を是認し更に英國委員報告中には露國をして甚だしき忍辱的地位に陷るゝが如き條項あり伊太利委員は斷じて之を認容し難しと述べたり

▲英首相對露賠償に贊成す

英國首相ロイド・ジョージ氏は十四日朝の會議の後露國委員の希望に從ひ勞農政府反對の軍事行動の結果として露國の蒙りたる損害は賠償するも可なりとの意見を述べたり（ゼノア發）

●露國對案を提出乎

▽戰前の國債は認むるも拂はぬ

經濟會議出席の露國委員は露國問題に關する對案を提出し露國改造の爲の同國內に投資するゝ外國資本に對しては充分の保障を爲し且つ戰前の國債を承認す可きゝ之を全部償還するは露國國力の許さゞる處なる旨宣言すべしと十四日者エキスチェンジのゼノア來電は報せり

▲混合裁判所案に絕對反對

尙右電報に依れば露國は聯合國公債と露國債との相殺提議並に露國に於ける外國人の生命財產保護の爲め混合裁判所設置案には極力反對すべしと但し露國は豫算の均衡を保たしむる爲めあらゆる手段を盡し財政の鞏固を計るべしと（倫敦發）

●歐洲聯邦の出現を期待す

▽ゼノアに無何有鄕信者集る

ゼノア經濟會議の爲め各國より參集せる人々の中には府來歐羅巴を打つて一丸となす一大聯邦の出現を期待する無何有鄕信者少からず伊太利の愛國者マヂニー五十年忌記念祭委員の發表したる宣言中にはマヂニーが人類の自由獨立の爲めに奮鬪せるのみならず歐羅巴聯邦を豫言したと說き經濟會議を以て之が先驅となし歐羅巴聯邦を設き平和は中立國たりしと戰勝國又は戰敗國たるに論なく凡ての國に依り保障されざる可らずと論じ居れり（ゼノア）

●愛蘭反徒法廷占領

▽叛軍總司令部に使用ぜん

愛蘭共和國軍の謀叛組に屬する一隊二百五十名は新たに組織されたる軍事委員會の指揮の下に昨十三日夜半ダブリン裁判所建築全部を占領したり叛徒は之を以て總司令部となす筈にて窓には土嚢を積み重ね官軍の砲擊に備へ居れり尙叛徒は隣接せるフォア・コーツ・ホテルをも占領せり

▲叛軍司令官該行動を辯明

ベルファスト・テレグラフ紙のダブリン通信員は愛蘭デ・ヴァレラ派軍司令官マッター・オカーナー氏に會見し右裁判所占領問題に就て談話を交換したるが同司令官は從來の司令部は手狹なる爲めと之を占領したるに過ぎず人民をして第二の革命來れりと信ぜしむる勿れと述べたりと（ベルファスト發）

●ベルファスト又復市街戰

▽復活祭週に死傷七名を出す

愛蘭休戰條約は十四日途に破毀されグッド・フライデーの朝ベルファストの街上には夜來の市街戰に斃れたる七名の死傷者を見るに至れり右死傷者の內前民二名は即死し一名は重傷を負ひ四名の警官は銃傷にて生命危篤なり右衝突は昨夜半加特力教徒の催せるものありフォールス・ロード附近は遂に一塊の修羅場と化したるが警官は此際無復仮的に狙撃されたるものゝ如し（ベルファスト發）

●聯合國獨逸賠償問題回答

獨逸政府が聯合國に對し賠償金を支拂ふ能はずとの通牒を發したるが聯合國賠償委員は公認支拂延期條件に基き來る五月三十一日迄猶豫すべしとの回答を發したり獨逸は賠償問題を經濟會議に審議せしむべく運動せるが右の回答に依り此問題は同會議の終る迄保留せられ後に到つて聯合國最高會議に廻さるゝことゝなれり（巴里發）

●佛國は陸軍縮小に反對す

佛國首相ポアンカレー氏は十四日發表せる公報に於て佛國はゼノア經濟會議に於ける陸軍縮小討議には斷じて參加せざるべしと公表せり（巴里發）

●北京の萬國基教學生大會

▽三十二ヶ國八百の列席者集る

萬國學生基督教徒同盟大會當市開會の結果九組の國際委員會はたる所聯合國賠償委員は公認支拂延期條件に基き來る五月三十一日迄猶豫すべしとの回答を發したり獨逸は賠償問題を經濟會議に審議せしむべく運動せるが右の回答に依り此問題は同會議の終る迄保留せられ後に到つて聯合國最高會議に廻さるゝことゝなれり（巴里發）

◆歷史湮滅の嘆（十）

＝出放題の史論＝　尺魔

□我々は歷史の尊重すべきを知るの額に達した時、其大部分を虐殺して其金を奪ふて、富豪となるに同時に、出放題の歷史談を書くの排斥しなければならぬ。處が多くの歷史は既往の事蹟を書くの中から亂なかつたのである。

□スタンフォードは加州金鑛發見時代、大陸橫斷鐵道を企てた大事業家で、時の大統領リンカーンを變を訂し、橫斷鐵道の保護金を中央議會に要求し、一哩に付六萬弗を得た程の腕利である。支那人の賃金を自分で預り約四十年間、加州の開發に盡した爲めに多少の非難を反對黨から浴びた。

□石川半山氏が昨年十一月十一日「日本及日本人」の特別號に掲載してある「米人の如く組野なる守」といふ一文中には隨分無鐵砲のことが書かれてある、其一節に曰く。

□「スタンフォードの如きは、支那人を使役して金鑛を掘り出し其賃金を自分へ預けさせ、相當に利益を收めたるに過ぎず、其人は、一人の幻想であつた。高橋子は首相としての試驗に見事落第した。而して今やまた政友會總裁としての試驗に散々の味噌をつけつゝある。是れと同時に原敬氏を失つた政友會の影がまた頓に薄らいで來た。極端に云へば政友會なる大政黨が表面だけでも統一の體面を維持して居るのは要するに高橋內閣なるものが曲りなりにも生存して居る爲めであるとしか思へない。是に於て力ないと云ふ爲めの問題許りではない。假令んば故原敬氏が生きて居ても此運命は早晩政友會を見舞はねばならなかつたのである。一言にして云へば既成政黨の存在價値を世人が疑ふと同時に、又同樣の意味で政黨員自己を疑ひ始めたのである。思ふに既成政黨は形式的に

歐洲新情勢電報（四月十四日神戸通信）

●支那に非基督教熱勃興す

▽萬國基督教學生大會に反對す

露國勞農派首相レニン氏はブラウダ紙に寄稿して過日伯林にて開催せる萬國基督教學生同盟大會に反對の氣勢を揚げ居れり支那青年は國威の失墜を以て悉く外國壓迫の結果として外國を呪へり學生の社會主義的傾向を有するものは外國人殊に米國人は基敎を以て自家勢力扶殖の用に供し歐米の基督教々會は皆資本階級の傀儡なりと罵り居れり現在は尙微力なるも將來恐るべき一大運動たるべく一般の警戒を要すべし（上海發）

●無政府派會議と露國首相

露國勞農派首相レニン氏はブラウダ紙に寄稿して過日伯林にて開催せる無政府主義者が會議を催し協定せる件に關し左の如く述べたり「右の會議にて露國勞農政府代表者が社會革命家に死刑の宣告を下すや又第三無政府主義者が此種の裁判に列席し居れるは露國政府の意志に違背せるものなり」とレニン氏は更に論じて曰く中流人士に依て樹立せらるゝ政府は果して其反對者の裁判に無政府王義者の列席を許すべきと反問せりと傳へらる（モスクロー發）

華盛頓電報（四月十四日神戸通信）

●民主黨內部の紛爭暴露す

▽前大統領とコックス氏の阻隔

前選擧の民主黨大統領候補者コックス氏の後に起るウィルソン氏は吾が米國を窟落より救ふ可く奮起する人ならば之を應援すべしと明言せる旨紹介し瞬に前大統領がコックス氏の立候補を承認せるが如き印象を與へたるが右に對しウィルソン氏は何人にも此の如き宣言を爲すべく許容したる事なしと打消したる爲め政界殊に民主黨幹客間に一の波瀾を捲起したり

●國際無線電會議

佛國、獨逸及び米國の代表者を含む國際無線電信會議十三日巴里に開かれ十三日には無線電話及びブラザルとアルゼンチンとに無線電信所を設置するの件を討議せり米國の首席代表者はラジオ會社長エドワード氏なり尙は右會議は來る十四日朝露國問題に關し會合したるが結局意見の一致を見るに至らず

●ブライアン否定

ブライアン氏は今秋の選擧戰にフロリダより上院議員の候補者として立たんとの說は浮說にて絕對的に立候補せずと聲明せり（ワイアレス發）

●大統領と海軍案

大統領ハーディング氏は十四日議會に送りたる書面に於て下院豫算委員會の決定せる六萬七千人賜金法案再延期

●賜金法案再延期

軍人賜金法案は上院財政委員會により再び來週月曜迄延期されたり（華府發）

●米露郵便の回復

米國郵政院は露國と米國との間の手紙及び小包郵便事務を取扱ふ事となれる旨掲示せり（華府）

●希臘軍休戰拒絕

小亞細亞スミルナに於ける希臘軍の本營は聯合列强近東會議の希臘と土耳其國民黨との休戰條項に同意する能はずと決議せり（アゼンス發）

●炭坑罷業益增大

全米國に亘れる石炭坑夫同盟罷業は今十四日にて滿二週間となれるが同坑夫同盟本部にては罷業人員は今週中に二萬五千人增加し總數六十六萬五千人に達したりと稱し居れり尙は同盟側にては罷業は未だ頂點に達せずと稱し居れり（インデヤナポリス）

●經濟會議休會說

經濟會議は來週一週間休會すべしと傳へらる（ゼノア發）

●レニン出馬風說

露國過激派首相レニン氏は外相チチエリン氏ゼノアに到着の二日後に變裝してゼノアに來りチチエリン氏一行を秘密に指揮しつゝありとの風說行はれる露國全權團は之れを否定も肯定もせず單にレニン首相の病氣全快せるのみ語れり（ゼノア發）

●癒兵病院費可決

癒兵救護病院增設に關する追加豫算一千七百萬弗支出に關する件は十四日上院本會議を滿場一致にて通過し直ちに大統領の手許に廻附された（華府發）

●希臘軍休戰拒絕

小亞細亞スミルナに於ける希臘軍の本營は聯合列强近東會議の希臘と土耳其國民黨との休戰條項に同意する能はずと決議せり（アゼンス發）

在留同胞諸賢

東西文明の融合

井上哲次郎博士曰「日本國民は東西文明の融合者也」と五車靈子曰「在留同胞は東西文明の融合の先驅者也」と評者曰「五車靈子の言眞に然り」と

同胞諸賢の義務

同胞諸賢は日米兩國の楔也、其樑たるの責務を果すには米國文明と我固有文化との長所を採り更に高等なる新文明建設の先驅たるに在り

故國雜誌の購讀

故國雜誌は東西兩岸の新思想を滿載し就中米國思想を詳說す、同胞諸彦は雜誌の購讀に由りて、日米文明の粹を會得し其責務を果せ

新聞紙の購讀

世界最近の思想傾向等は悉く照介批評して餘蘊を所蔵し、紫堂は東京大阪の諸新聞を直輸入諸賢の利便に供す、郵稅共一箇月一弗

郵稅値上げ

故國郵稅倍加し故國直接御註文は却つて御損也、紫堂に依らば遙に安價也、迅速安價は紫堂の特徴也、紫堂に顧客方に新購者に凡ゆる便宜を與ふ

日本御料理　小川ホテル
桑港カリホルニア街六一二　電話カニー一八一六

日本行汽船切符取扱　帝國ホテル
ガーフィルド二一八一

日本行汽船切符販賣
羅府東第一街三三一半
日本行汽船切符取扱（電話）二一七〇四
みかどホテル
3314 E. First St., Los Angeles, Cal.

551 Pine St., S. F. Cal.

THE SUMITOMO BANK, LTD.
(COMMERCIAL)
315-319 California St., San Francisco Calif.
Tel. Sutter 196
株式會社住友銀行
一本國特別定期預金（利息日下年六分）
桑港支店　桑港カリホルニア街三一五—三一九
桑港支店　桑港カリホルニア街三一五—三一九
桑港カリホルニア州の居住者にして特別小口當座預金を御預り出來る者及び積金の當行各店にては特別小口當座預金を御預り出來る者及び積金の當行各店にては特別小口當座預金を御預り出來る者

THE YOKOHAMA SPECIE BANK, LTD.
415-429 Sansome St., San Francisco, Calif.
P. O. Box 3125　Tel. Kearny 1396
本店　通知預金　定期預金
特別預金　利息年六分
十ヶ年迄（重利）目下利息年六分
資本金一億圓積立金六千一百萬圓
預金總額五億五千七百萬圓
外國爲替預金送金貸附割引等一般銀行業務一切
桑港支店
横濱正金銀行
郷里送金
日本全國何レノ地ヘモ無手數料
最近便ニテ發送

座敷幟　武者人形
鯉吹流し　掛軸類
端午節句　五月五日
各種共金一弗五十仙より金二十五弗まで
御好次第進呈
目錄御申越次第進呈
青木大成堂
1601 Geary St.
Tel. West 5361
San Francisco, Cal.

府羅　イーグルホテル
各室、湯、水、スチーム、セーター等最新設備完全
HOTEL EAGLE 129½ E. First St., L. A. Calif.

府羅　ホテルニューヨーク
スプリングストリート第二街二〇五（電話一二八六一）
食堂、自動昇降機、スチーム、セーター等最新設備
Hotel New York 315 E. 2nd St., L. A. Calif.

日本行汽船切符御申込に應ず
日本御料理　小川ホテル
桑港カリホルニア街六一二　電話カニー一八一六

北米の五車堂
Tel. West 5488　1698 Post St., S. F. Calif.

CAL. STATE LIBRARY, SACRAMENTO, CAL.

◎廿五日の兩議院
重要議案は丸潰し
昇格＝陪審＝過激法の流産
紛亂に初め紛亂に幕を閉ず

▼昇格案　政府が過激派取締法案を提出し、其通過を計つた爲め順次他の重要法案の審議に支障を來し貴族院では二十四日の本會議で昇格案の質問が終らず二十五日最終日午後に至つて漸く豫算總會に廻附し然かも總會では規定數を缺いで遂に散會するの已むなきに至つたから茲に

▼高田耘平君　は今期議會に不成立に決して仕舞つた金圓より上京した學生は涙を振つて傍聽席よりすごゝと退場する其可憐さ、又陪審法案は賀川氏等の間に亘りしば研究會内にも此案に多數の反對者あり為めか反政府派質問を或る程度まで默認して長時間に亘り遂に

▼握潰し　に決し又兼議院では過激法案は遂に最終日と云ふに上程の時機を失し其他所謂

▼岩崎君何や　長之れに應じて何やら宣言したが、

▼一大亂鬪と　なつた守衛も殆ど總掛りで約十分の後漸く取鎮め十一時四十分振鈴は五度目の開會を報じ同四十五分議長着席し水が高田耘平君依然演壇を去らず議場喧騒中高田耘平君修正意見を述べ終つて降壇すれば岩崎君高田君の修正案否決の動議を出し與議長採決を宣したるも議長着席して開會、佐々木安野黨側聽かず與議長は記名投票を取押へんとすれば安藤正純君が進み出て奥議長は暫く

▼昇格案は　賀川氏等の議代議士バラ〜と駆け付け忽にして

▼樋口伊之助　君が駆け上り一議場をワヤにして議事を妨げなんぼは男らしうたまへん腰づくなんぼ誰でも來なはれチア來なはれ」と腕を捲したが相手になるもの一人も無く十一時半に議長着席して開會、佐々木安五郎君議事進行につき發言を求めたが議長許さず政友會の岩崎君「議事進行に就いて緊急動議あり」と叫ぶや野黨側足踏み鳴らし卓々叩きて大に騒ぎ立て喧騒囂々たる中に

▼席上に突ッ立ち　高田君に失言あれば誰れか人議事進行につき發言を求むれば足りる決して懸援してはいかぬ

▼逃べたが政友會の中西六三郎君何事か發言したるも野黨側一斉に拍手して之を妨げ全く聽き取れず議長之に對して何事か宣言したるも是亦聽取れず議長は休憩を宣し退場したが時に午後二時二十五分野黨側は一人も退席するものなく高田君亦壇上に跡止まつた其處へ政友會の樋口伊之助君が駆け上り

▼奥議長　政會等の議代議士バラ〜と駆け付け忽にして

▼一大亂鬪と　なつた守衛も殆ど總掛りで約十分の後漸く取鎮め十一時四十分振鈴は五度目の開會を報じ同四十五分議長着席し水が高田耘平君依然演壇を去らず議場喧騒中高田耘平君修正意見を述べ終つて降壇すれば岩崎君高田君の修正案否決の動議を出し與議長採決を宣したるも議長着席して開會、佐々木安野黨側聽かず與議長は記名投票を求めたが議長許さず政友會の岩崎君「議事進行に就いて緊急動議あり」と叫ぶや野黨側足踏み鳴らし卓々叩きて大に騒ぎ立て喧騒囂々たる中に

▼岩崎君何や　長之れに應じて何やら宣言したが、

▼席上に突ッ立ち　高田君に失言あれば誰れか人議事進行につき發言を求むれば足りる決して懸援してはいかぬ

▼逃べたが政友會の中西六三郎君何事か發言したるも野黨側一斉に拍手して之を妨げ全く聽き取れず議長之に對して何事か宣言したるも是亦聽取れず議長は休憩を宣し退場したが時に午後二時二十五分野黨側は一人も退席するものなく高田君亦壇上に跡止まつた其處へ政友會の樋口伊之助君が駆け上り

▼樋口伊之助　君が駆け上り一議場をワヤにして議事を妨げなんぼは男らしうたまへん腰づくなんぼ誰でも來なはれチア來なはれ」と腕を捲したが相手になるもの一人も無く十一時半に議長着席して開會、佐々木安野黨側聽かず與議長は記名投票を求めたが議長許さず政友會の岩崎君「議事進行に就いて緊急動議あり」と叫ぶや野黨側足踏み鳴らし卓々叩きて大に騒ぎ立て喧騒囂々たる中に

▼岩崎君何や　長之れに應じて何やら宣言したが、

▼席上に突ッ立ち　高田君に失言あれば誰れか人議事進行につき發言を求むれば足りる決して懸援してはいかぬ

▼逃べたが政友會の中西六三郎君何事か發言したるも野黨側一斉に拍手して之を妨げ全く聽き取れず議長之に對して何事か宣言したるも是亦聽取れず議長は休憩を宣し退場したが時に午後二時二十五分野黨側は一人も退席するものなく高田君亦壇上に跡止まつた其處へ政友會の樋口伊之助君が駆け上り

▼樋口伊之助　君が駆け上り一議場をワヤにして議事を妨げなんぼは男らしうたまへん腰づくなんぼ誰でも來なはれチア來なはれ」と腕を捲したが相手になるもの一人も無く十一時半に議長着席して開會、佐々木安野黨側聽かず與議長は記名投票を求めたが議長許さず政友會の岩崎君「議事進行に就いて緊急動議あり」と叫ぶや野黨側足踏み鳴らし卓々叩きて大に騒ぎ立て喧騒囂々たる中に

▼奥議長　席上に突ッ立ち　高田君に失言あれば誰れか人議事進行につき發言を求むれば足りる決して懸援してはいかぬ

▼逃べたが政友會の中西六三郎君何事か發言したるも野黨側一斉に拍手して之を妨げ全く聽き取れず議長之に對して何事か宣言したるも是亦聽取れず議長は休憩を宣し退場したが時に午後二時二十五分野黨側は一人も退席するものなく高田君亦壇上に跡止まつた其處へ政友會の樋口伊之助君が駆け上り

▼樋口伊之助　君が駆け上り一議場をワヤにして議事を妨げなんぼは男らしうたまへん腰づくなんぼ誰でも來なはれチア來なはれ」と腕を捲したが相手になるもの一人も無く十一時半に議長着席して開會、佐々木安野黨側聽かず與議長は記名投票を求めたが議長許さず政友會の岩崎君「議事進行に就いて緊急動議あり」と叫ぶや野黨側足踏み鳴らし卓々叩きて大に騒ぎ立て喧騒囂々たる中に

▼昇格案　は今期議會に不成立に決して仕舞つた金圓より上京した學生は涙を振つて傍聽席よりすごゝと退場する其可憐さ、又陪審法案は賀川氏等の間に亘りしば研究會内にも此案に多數の反對者あり為めか反政府派質問を或る程度まで默認して長時間に亘り遂に決し又兼議院では過激法案は遂に最終日と云ふに上程の時機を失し其他所謂

▼岩崎君何や　長之れに應じて何やら宣言したが、

▼

後二日に押詰つた 第二回副賞投票締切

今や各團體必死となつて活動 下位の團體大に色めいて來た

ハンフォード學園の決心

昨日の締切の成績を見ると上位に在る團體よりも下位に在る團體の方が移動を多く見せたことは即ち第二回

▼副賞投票の主旨に適した現象である、上位のものは必ずしも入賞するとは限らない三月廿八日發表以來の成績の如何に依ることであるから下位のものでもあれば以來大活動して多數の投票を獲得して居りさえすれば入賞が易々たるものである、既に此事が了解され下位の團體で最近大活動を始め滅切り

▼此問題のため會合を催し協議の結果此地方に於ける今日迄の同情者に對し其厚意を謝するため且つキ郡同胞の學園に贈する試金石として是非其最後迄戰はむとの決議をなし本日より各理事は手分をして大活動を開始するさうである

第二回副賞投票締切日は愈々接迫して後二日を剩すのみである

地方別 投票數

羅府 モヲタ	五〇二一〇二
桑港 須市	二七〇八〇九
羅府	三五六二七
桑港 ベンリン	三三九三三
羅府	三三五〇五八
桑港	二五九五九九
桑港	二一七三八一
桑港	一七九一〇一
桑港	一八八四九
桑港	六四六五六
桑港	五九〇九七
桑港	五五七三三
桑港	四六五三六
桑港	二五五九六
桑港	二〇一九四
桑港	一九三四七
桑港	一八二〇〇
桑港	一五六五六
桑港	一四〇六〇
桑港	一三五六八
桑港	一二五五五
桑港	一一五五六
桑港	一〇五四八
桑港	九三四九
桑港	八三四七
桑港	七八四九
桑港	六九四二
桑港	六三六五
桑港	六三〇八
桑港	六二〇六
桑港	四二〇八
桑港	四二〇三
桑港	四二〇二
桑港	四二〇一
桑港	三四〇四
桑港	三四〇三
桑港	三四〇二
桑港	三四〇一
桑港	三一〇五
桑港	二六〇〇
桑港	二五四五
桑港	二三三〇
桑港	二〇〇一
桑港	一八二五
桑港	一六一八

南加熊野愛友會	五〇二一〇二
ガデナ平原青年會	二七〇八〇九
桑港 佛教會學園	三五六二七
桑港 須市	三三九三三
桑港 教青年會	三三五〇五八
本願寺佛教會	二五九五九九
桑港	二一七三八一
桑港	一七九一〇一
桑港	一八八四九
桑港	六四六五六
桑港	五九〇九七
桑港	五五七三三
桑港	四六五三六
桑港	二五五九六
桑港	二〇一九四
桑港	一九三四七
桑港	一八二〇〇
桑港	一五六五六
桑港	一四〇六〇
桑港	一三五六八
桑港	一二五五五
桑港	一一五五六
桑港	一〇五四八
桑港	九三四九
桑港	八三四七
桑港	七八四九
桑港	六九四二
桑港	六三六五
桑港	六三〇八
桑港	六二〇六
桑港	四二〇八
桑港	四二〇三
桑港	四二〇二
桑港	四二〇一
桑港	三四〇四
桑港	三四〇三
桑港	三四〇二
桑港	三四〇一
桑港	三一〇五
桑港	二六〇〇
桑港	二五四五
桑港	二三三〇
桑港	二〇〇一
桑港	一八二五
桑港	一六一八

桑港 須市	三三九三三
桑港	三三五〇五八
桑港	二五九五九九
桑港	二一七三八一
桑港	一七九一〇一
桑港	一八八四九
桑港	六四六五六
桑港	五九〇九七
桑港	五五七三三
桑港	四六五三六
桑港	二五五九六
桑港	二〇一九四
桑港	一九三四七
桑港	一八二〇〇
桑港	一五六五六
桑港	一四〇六〇
桑港	一三五六八
桑港	一二五五五
桑港	一一五五六
桑港	一〇五四八
桑港	九三四九
桑港	八三四七
桑港	七八四九
桑港	六九四二
桑港	六三六五
桑港	六三〇八
桑港	六二〇六
桑港	四二〇八
桑港	四二〇三
桑港	四二〇二
桑港	四二〇一
桑港	三四〇四
桑港	三四〇三
桑港	三四〇二
桑港	三四〇一
桑港	三一〇五
桑港	二六〇〇
桑港	二五四五
桑港	二三三〇
桑港	二〇〇一
桑港	一八二五
桑港	一六一八

桑港	二五九五九九
桑港	二一七三八一
桑港	一七九一〇一
桑港	一八八四九
桑港	六四六五六
桑港	五九〇九七
桑港	五五七三三
桑港	四六五三六
桑港	二五五九六
桑港	二〇一九四
桑港	一九三四七
桑港	一八二〇〇
桑港	一五六五六
桑港	一四〇六〇
桑港	一三五六八
桑港	一二五五五
桑港	一一五五六
桑港	一〇五四八
桑港	九三四九
桑港	八三四七
桑港	七八四九
桑港	六九四二
桑港	六三六五
桑港	六三〇八
桑港	六二〇六
桑港	四二〇八
桑港	四二〇三
桑港	四二〇二
桑港	四二〇一
桑港	三四〇四
桑港	三四〇三
桑港	三四〇二
桑港	三四〇一
桑港	三一〇五
桑港	二六〇〇
桑港	二五四五
桑港	二三三〇
桑港	二〇〇一
桑港	一八二五
桑港	一六一八

▼好成績を收めて居るものが出て來た、例へばバレヤ學園ガデナ小兒院、ハンフォード學園、潟東基督教平信徒同盟會、ソノマ郡青年會、寧州同胞發展會、サンマテオ學園、ポートランド岡山海外協會孫がそれである、就中ハンフォード學園の意氣込み實にスサマジいものがある

▼最後迄戰はむ

ハンフォード學園は昨夜理事會を催し日米懸賞投票に關する協議會を開いた此協議會はもつて十七日正午を以て締切ちるかを決し用ひて實施されて居るから此の際各團體の大奮發を希望する

▼第二回副賞投票

諸規定左の如し

▼投票獲得競爭

三月廿八日發表の各團體得票數と四月廿日發表(締切四月十七日)の當該團體の得票數とを比較し其差の最大なるものより順次十團體を當選と定む

例

三月廿八日現在の得票數	四月廿日發表の得票數	其差數
甲團體 (得票) 一〇〇〇	七三〇〇〇	六二〇〇〇
乙團體 七二〇〇〇	九六〇〇〇	二四〇〇〇
丙團體 一三〇〇〇	二三〇〇〇	一〇〇〇〇

右の如き結果を示したるものの假定以ば乙團體一等、甲團體二等、丙團體三等となるの筈なり

一、締切時間 四月十七日 午後一時

一、發表 四月廿日 永延三面

即ち本紙に直接投票は十七日正午に締切る、郵送票は投票は十七日正午以前の加州內郵便局證印あるものに限り同票時間前に本社へ着したるものを有效とす、但し交通機關其他の故障による郵便物遲着は發信者自身のリスクにして本社其責に任ぜず

◇賞品

第二回副賞投票

一等	金庫一個 一ヶ年分
二等	ヘクタフフ奈良漬一樽、味噌一樽
三等	カードキャネット一箱 米一俵、味噌一樽
四等	醫時計 一箱 すし子一樽、味噌一樽
五等	勝時計 一箱 鮭粕漬一樽、味噌一樽
六等	すし子一樽、米一俵
七等	二樽
八等	米 一俵
九等	米 一俵
十等	米 一俵

米國三月の貿易增加

輸出超過七千四百万

商務省は一昨日米國三月の統計を發表したが輸出は三億三千二百萬弗で昨年十月以來最高の數を示し輸入は二億五千八百萬弗で一昨年十二月以來の最多額である又三月の

▲輸出超過は七千四百万弗で昨年十一月以後の最高であり昨年三月には一億三千五百萬弗であつた本年三月の輸出に比するに昨年三月は三億八千七百萬弗戰前の一九一四年三月は一億八千七百万弗である、輸入は一年前は二億五千二百萬弗一九一四年三月には一億八千三百萬弗であつたと

日本人問題

ギユリック博士が日本人移民に對し特別法案を發布すべきや否やに就き一論文を發表し小冊子として米國政治家論客等に配布したる該書は一九二〇年にジヨンソン氏が

▲委員長と成つて議員團を組織し沿岸各地に於ける日本人生活を視察せる後の報告書に基し同本人問題決して他人種に劣る

(日米支社三月三十日發信)

ギユリック博士新著

日本人問題

▲會釋もない自由奔會合から非常に面白かつた肉山中編集長の歸朝歡迎會は在米日本人聯合會、東、京支部の主催で二十八日夜六時から芝公園紅葉館で開催されが植原悅次郎、清澤洌、池田五六其他の諸氏の出席があつて滿宴の間に日米問題に關いての話題に花が咲き頗る興味多き會合であつた

▲米國と

して若し其を必要とするならば米國の恥辱である堂々たる意見を發表して居る本書は在日會へ多數到達して居るから必要な人は同會北澤佐雄氏迄申込れ度しと

桑日時局費

二千五百弗の良成績

桑日會にて時局費分擔額寄附金の募集中なり同胞の至つて大なる時局問題の費用として頗る成績良く先日應募額の締切りを爲したるを以て昨日同會より寄附者芳名簿を作製し夫々各地方委員其他の役員に配布せしが寄附員六百七十九名にして寄附總額二千五百六十五弗二十五仙

▲委員其他の役員に配布せしが寄附者は守備完璧ペラグ充分にして容易に敵の塞壘を許さない一壘手としては前記新宅の外に坂田が居る二壘手の逸見は守備固く塞壘に妙を得三壘手佐々木は强打者で補缺として廣川がある而して遊撃の髮村はチームの守備攻撃共に完璧

▼主將で

好プレヤーだ外野手としては滿手あるチーム全體として見ても近頃珍もしく粒が揃つて居る一方是れと對戰する佐市旭チームの陣容を見るに投手としては山田、荒木がある前者は主將だけあつて守備打擊共に老巧明日の

▼二壘手

として出場するだらう荒木は落ち着きあるコントロール良き好投手で打擊も勝れて居る捕手瓜生は次第に落ちも着が出來頭腦の良いので評判だ一壘手堀江は長身にして捕球正確三壘手目永と主將山田とを合せて堂々たる內野である遊撃の坂本は敏途に望みがある外野手としては竹下、丹原、上村共に守備よく且つ走壘打擊に長けて好プレヤーだ

▼補缺として

尙は山東、川越、神崎の三人がある、尙は岡野球團の關係者は團長岡垣吉太郎、支配人吉原佐一郎、フイールド支配人秋月雄、書記谷澤武雄、會計有田歳會主、顧問井上善三郎、高木甕之助、石川信吉、檜山嘉市、弓倉宇一郎の諸氏である

▼珍しい

例である捕手は川村と築村の二人があるが前者は守備完璧ペラグ充分にして容易に敵の塞壘を許さない一壘手としては前記新宅の外に坂田が居る二壘手の逸見は守備固く塞壘に妙を得三壘手佐々木は强打者で補缺として廣川がある而

▼裁可して

も思ふが今回の所では兩院の意見に相異の點多く存すれば結局兩院協議會の問題となるべき形勢にあつて早く運んで六月中旬に決定するか然らざれば夏期休暇後の九月に延期されるであらう今日の所から見ると六月中に法律となることは餘程困難しいものと考へられる

▼調査研究

中であつたフオードネー新關稅案正案は去る十一日に上院の本議會に報告され其內容は原案よりは大部變更を來した併し之も亦最後のものでなく尙數多の變化あるものと豫期せねばならぬ、又上院は此の案を討議して上院の案として下院に回附し兩者の意見が一致すれば大統領は同問題を永く不安狀態に置くことを好まぬ故直ちに

法律となること

法律となることは

強みは

多く的有力なる參考の爲め昨日書記長渡邊氏より左の發表あり『上院財政委員會に於て

▼調査研究

中であつたフオードネー新關稅案正案は去る十一日に上院の本議會に報告され其內容は原案よりは大部變更を來した併し之も亦最後のものでなく尙數多の變化あるものと豫期せねばならぬ、又上院は此の案を討議して上院の案として下院に回附し兩者の意見が一致すれば大統領は同問題を永く不安狀態に置くことを好まぬ故直ちに

法律となること

者にあらざ移民制限を爲すが如きは世界人種の根本問題たるべき黃白人種間の軋轢を益々紛糾せしむるものであるから如斯老練の聲高く一壘手として亦卓越した技量を持つて居る佐古はハイスクールの投手で數遠の花形としては中川が居り更に補缺として四人のピッチングスタフを持つと云ふことは

▼強みは

多く的有力なる參考の爲め昨日書記長渡邊氏より左の發表あり『上院財政委員會に於て

▼調査研究

中であつたフオードネー新關稅案正案は去る十一日に上院の本議會に報告され其內容は原案よりは大部變更を來した併し之も亦最後のものでなく尙數多の變化あるものと豫期せねばならぬ、又上院は此の案を討議して上院の案として下院に回附し兩者の意見が一致すれば大統領は同問題を永く不安狀態に置くことを好まぬ故直ちに

法律となること

法律となることは

優勝試合愈始まる

佐市旭野球團と布市體育會決戰

日曜日午後布市運動場の大壯觀

◇堂々たる兩軍の陣容

本紙主催の加州同胞野球大會は明十六日を以て優勝試合の季節とし會職することになつた布市チームは昨年の決勝試合で意外の失敗を招いた宿怨綿々として

▼連勝し

た餘威を振つてフレスノに遠征し中加の代表チームで本年度の最强チームと嘯さる佐市旭野球團と華々き好プレヤーだ外野手としては守備攻撃共に完璧ペラグ充分にして容易に敵の塞壘を許さない一壘手としては前記新宅の外に坂田が居る二壘手の逸見は守備固く塞壘に妙を得三壘手佐々木は强打者で補缺として廣川がある而

▼連勝し

た餘威を振つてフレスノに遠征し中加の代表チ

壺きす

明日布市にて中加代表の布市體育會と優勝戰會する沿岸代表の佐市旭野球團選手と其後援者……(石野寫眞館撮影)……

同人會

●在京日米

歡迎會其他の消息

嘗て日米新聞に關係して居て今は東京に居住する人々は在京日米同人會なるものを組織して時々一堂に相會なるものを組織して互に舊交を恰度山中仲二君が久振りに歸朝し其の歡迎會と、是れも元本紙に居た山野樂器店主人山野政太郎君が來月十四日東京を出發して歐洲を經て來國巡遊の筈なので其の送別會に、又米田實君が法學博士を授與せらるゝので其の

▲祝賀會

を兼ねて二十九日午後五時半から日本橋の陪樂園に晩餐會を催しなる出席者は五味榮也▼陽露香▼相良忠雄▼武藤之丞▼小林直▼市原千葉▼櫻井二▼米田實▼野村政太郎▼赤堀惠▼市川藤市▼鈴木榮▼藤谷榮一

の十三名で其他の諸氏は當夜差支もつて出席されなかつたが何にせ多年一つ釜の飯を食つた連

奈良漬一樽「大麵味噌製造所」

味噌一樽 同

味噌五樽 藤本商會

すど子粕漬三樽 海陸商會

鮭粕漬一樽 同

米五俵(魚喜) 酒井 商店

◆第二回副賞寄贈品

日米新聞社

九月以後か

結局協議會問題

渡邊商議書記長聲明

米國改正關稅案の經過に關し昨日所より日本人商業會議所に照會

▼今春の

野球季節に入つてからは地方米人の强チームとひ三週四の惜しい敗をしたが中加平原リーグの選手權保有者たるダイユーバ軍を三對一に擊破し同胞好球家の意を慰みに强米國に於ける強チームの評判を聞

關稅案通過は

●關稅案通過は

十五、十六(土、日)兩夜午後正七時半より

桑港佛教會興行會社

世話人 桑港興行會社

興行會社

メダイ

興行會社

書劇辯士 河本青果

塚原下傳 石川五右衛門

茶屋仇討

毛谷村六助 天下

可致候間賑々敷御來觀の程希望仕候

桑港佛教會ホールに於て左の藝題活動寫眞興行

●三輪氏夫人死去 市內キャリフオニア街二四の三輪商會主三輪武夫氏夫人は東京に在りて病氣療養中の處本月上旬死去せりと一昨日某所へ訃電到る

●香川常吉氏次女死去 中央貿易社長香川常吉氏次女幾代(七才)は去る三月廿六日百日咳を病んで死亡せる旨一昨日同社大阪支店より通知ありたりと

●河上氏送別會延期 河上清氏の送別會は本日小川ホテルにて催す筈の所來る十八日午後七時に延期會場は矢張同ホテルだと

●水澤辰四郎を尋ね 落日米銀行預金の件にて銀行監督官より商業會議所へ依頼し來りたるに就き同所にては水澤辰四郎の住所を尋ね居れり

公共團體援助

投票規定

現金五千弗提供

◆公共團體援助投票規定

一、本社は既に發表したる計畫を以て現金五千弗を提供し本規定に準據し投票の多寡を以て等級を定め當選者に之を贈與す

二、米國內に在る日本人公共團體又は其代表者はその種性質の如何に係らず本懸賞投票の榮譽者として自らこの壁明し又他人の推薦により此の競爭に參加する事を得

三、本投票は二月二十二日を以て開始し五月二十五日を以て終る但し右期間を變更する場合には締切期日一週間前に之を公表告すべし

四、投票用紙は、前記期間中毎日本紙に一枚に對する投票權利數は之を投票用紙に明示すべしとの、外本社は本紙現在の購讀者に及び新に購讀を申込み前金を拂ひたる者に對しては各一枚の投票用紙を贈與す

五、投票券を得たる者は之に指定の事項を記入し投票者の住所氏名を明瞭に書すべし、郵便物の紛失に對しては本紙其責に任ぜず

六、投票用紙の有効期間は其發行の日より起算し加州內は一週間加州外は十五日間以內とす

七、以上の規定に違背せざる投票及び投票規定解釋の疑義に關しては投票係之が解決の全權を有す

◇五千弗の內譯

一等	金二千弗
二等	金一千弗
三等	金七百弗
四等	金三百弗
五等	金二百五十弗
六等	金二百弗
七等	金百七十五弗
八等	金百五十弗
九等	金百二十五弗
十等	金百弗
合計	金五千弗也

日米新聞社

御金遊は

確實有利なる日本の

公債 株式へ

獨逸紙幣

ペルリン市債 四分利附

買附委托に應ず

國債、社債、株式、英貨公債、自由公債、割增金附勸業債券

賣買委托

公認公債株式賣買 岩山商會

1900 Bush St., San Francisco, Calif. Tel. West 8801

投票用紙

候補團體名稱	團體所在地名	票數	有効期限
		1	此投票用紙は加州內は四月廿一日午後五時(本社着)迄有効なり 加州外は四月廿九日(本社着)迄有効なり

千九百廿二年 四月十五日

今日は野遊會より付き各旅館休業仕り候也

桑港旅館組合

野遊會委員

自働車係 木下、中野、土田、井木、倉智

餘興係 服部、三保、井木、汐崎、宇佐美、中村

福引係 中野、出島、田中、青木、門野、服部

招待係 福島、片岡、田中、田村、吉村、永本、近江屋

競技係 門野、鄉原、土田、八田、小松、矢野、末廣、倉智

場所 サラトガ

當日は午前八時サウスパークに集合

同九時出發

東洋汽船株式會社

電話サター三九〇〇

マーケット街五五一

船名	發	着
波斯丸	四月廿八日	五月五日 (波止場卅四)
大洋丸	五月三日	五月十一日
洋丸	四月廿九日	四月卅日
安洋丸	五月廿二日	五月廿四日 (南米行)
西比利亞丸	五月廿三日	五月卅一日
天洋丸	六月三日	六月十一日
ロレア丸	六月十日	六月二十日 日本行
靜洋丸	六月廿六日	六月廿八日
春洋丸	六月廿六日	七月五日
銀洋丸	六月廿九日	七月一日

空翔る人

北尾亀男

【其一七】

戸板に載せて病院へ擔ぎ込んだ村上の負傷は、兩大腿骨折と脳震盪とであつた。彼は丁度三晝夜の間、意識が返らずに時々譫言を口走つてゐた。然し生命別條はなかつた。

墜落の原因は飛行家の黒川の實見した專門的の觀察に依ると目測の錯誤であつた、墜落狀態に移つたのは約六米突の高度で當時無風であつた、周圍の狀況から察するに、操縦上の過失以外に何等墜落の原因を認める事が出來ない。つまり村上は既に地上に着いたものと目測を見過つて操縦したのか、まだ五六米突もの高度にあつたので、飛行機は忽ち垂直旋下になつたのである。で、新聞などには忽ち操縦上の過失が墜落原因であると書いて了つた。

黒川はよく考へて見ると、あの村上がそんな下手な事をやる筈がないのだが、前の晩の酒や睡眠不足で餘程苦しかつたに違ひない、うこへ折惡く眼鏡をかけて居なかつたかも知れない。

村上は昏睡狀態から覺めてもまだ頭に異狀があつて、時々辻褄の合はぬ事を云つたり、人を見違へたり、さうかと思ふと途方もないまるで狂人のやうな樣子をしたりすることがあつた。

ある日も黒川が病室に顏を出すと、

「あゝ内村君」

と、如何にも用ある氣に黒川を呼びかけた。

「僕に内村君じやないよ、黒川だよ」

と、黒川は枕元の方に行つて、うの顏を出して見せたが、村上はそれが耳にも入らない樣子で

「君、僕はひどい眼に遭つたよ、この間、君の一週忘の日にさ、こせばいゝものに眠い眼をこすり〳〵君の追悼飛行をやつてね、その時さ、どうしたんだか知らないけれど、こんな怪我をして了つたよ」

と、黒川の顏をまじ〳〵と見詰めながら、如何にも尤もらしく眞面目に云つた。

「僕の飛行機はどうしたもう？壞れたらうを」

「少し壞れたよ、然し直きに直る」

と、黒川は氣休めにかう云つたが、實際は殆ど原形を止ない程度にひどく粉碎して了つてゐるのである。それに發動機にも所々重要な個所に罅が入つてゐるので、迚も完全な修理は出來さうもないのだ。

「さうか、矢張り壞れたか、然し君のやうに操縦線は切れやしまい？」

と、村上は飽まで死んだ牧三郎を呼びかけた。

「僕に内村君じやないよ、黒川だよ」

と、云ひかけて、怖ろし氣に四邊を見廻した。

遊女を妻よ（三）

戀の俘となつた伊豆のやさ男

僕を兩親は今度の騒動者と一途に思ひ込んで、この結婚を許す代り、山田に僕と當分絶交せよとの條で、詰め腐まるか縁まらぬといふ場の事故、うれも承知したら、當分遠ざかつて居てくれ、今回も逢はずに歸つて逝つて呉れる筑波山、筑波は私がお友達私しや一生土掘らう

◇一口噺

茶目「祖父さんの禿頭をブラシで擦つて上たら直ぐ毛が生わかつて黒くなつたよ」

祖父「此奴、靴刷子で擦つたナ」

甲「政友會はナゼ普選に不贊成なのかナ」

乙「貧乏人の味方ぢや金にならないからだらう」

◆民謡

筑葉山

鍬を擔いで野に出れば
迎へて呉れる筑波山
鍬を擔いで野を戻りゃ
逢つて呉れる筑波山

◆伊太利中將の父を尋ねて（一）

今は伊太利の首都羅馬の製鐵所の顧問として最近まで陸軍中將の要職にあつた伊太利人を父に持つた恩人公は大阪市北區新船津橋北詰電車道を北へ半丁許り行つた東側で目下郵船會社大阪支店專屬の回漕店を開いてゐる大島延太郎氏の紹介で、今日の地位に漕ぎつけるまでには色々な悲しい物語がある話は明治十七年の昔に歸る

◎日本人を母に

その生みの母は今から二十三年の昔、數奇な運命に弄ばれて異郷の地にある父の顏見たさの宿願が屆き育て上げて呉れた恩人達の骨折りで念願來る五月二日神戸解纜の郵便船根丸で遙々伊太利羅馬まで三十六年振りで

◎父子の名乘り

をあげに行くといふ感動的な經歷を持つた混血兒の紳士がある、物語の主人公は大阪市北區新船津橋北詰電車道を北へ半丁許り行つた東側で目下郵船會社大阪支店專屬の回漕店を開いてゐる大島延太郎氏の紹介で、今日の地位に漕ぎつけるまでには色々な悲しい物語がある話は明治十七年の昔に歸る

◎大阪の實業界に活躍して

ゐるが同氏が天涯寄る所なき不遇の孤兒として世の荒波に揉まれ〳〵つゝ人間苦の辯々相を體驗して今日の地位に漕ぎつけるまでには色々な悲しい物語がある話は明治十七年の昔に歸る

誓ひ、順調に纏まつた縁談も遂に破れて、折角大勢の苦心も水泡に歸した、唯だ氣の毒なのは紅葉で、みめ容貌を如何に樂しみに待つてゐたでせう

運命の神の惡戯

も此處に至つては實に人生の悲慘事で、其後紅葉が自棄になつて見世は怠る、男は呪ふ、酒は飲む、秋になつて着る衣服もなく、實に困つたと、高とい其の新造がこぼしたと云ふのも最もの事深く紅葉に同情せした

——（をはり）——

加州州立歯科醫會

桑港公認歯科醫師

桑港ゲリー街一五二六（いろは館）

桑港公認醫師會（エビ醫師）

桑港ポスト街一六三一 電話ウエスト七二六二

桑港公認醫師會

桑港ポスト街一六三一 電話ウエスト一六三一

桑港ポスト街一六三一 電話ウエスト一六三一

桑港ポスト街一六三一 電話ウエスト一六三一

◆牛津、劔橋兩學＋＋＋卒業生催しの午餐會に兩皇儲殿下の行啓

◆御滯京第三日目（昨日着　本社東京特電）

＝昨日東京倶樂部に於いて

御滯京第三日目の本日はグード、フライデーに相當すれば英國皇儲殿下には御安息の意味に公式の御接待を受けさせ給はざりしが牛津、劔橋兩大學卒業生の催せる午餐會に列し給ふべく東京倶樂部に行啓あり

▼又我攝政宮殿下にも昨年御訪英の際、劔橋大學の名譽學位を受けさせ給へる故を以て同じく午餐會に御列席相成りたり、尚は攝政宮殿下が東京倶樂部に行啓遊ばされしは是れが二度目にて前回は御歸朝後間もなく今回と同樣兩大學卒業生の御招待を受けさせ給へるなり

▼降雨にて御延期

兩殿下はゴルフ競技を駒澤のリンクにて御試みの豫定が

攝政宮殿下には昨年御訪英の御り英國皇儲殿下と共にゴルフの競技を遊ばされ御歸朝後も然心に御練習を積ませ給へるが今回英國皇儲殿下の

▼御來遊を機とし兩殿下には再び同競技を共にし給ふべく本日は其御練走にて府下駒澤の東京ゴルフ倶樂部リンクにても夫れ〴〵準備を整へ居たるが折惡しく降雨あり爲め御延期と相成りたり

▼盛大なる提灯行列

青年會主催にて數十萬の青年參加し火の流歡の聲

十四日東京發パブリック・レッヂャ電報

御滯京の英皇儲殿下に歡迎の意を表すべく日本青年會主催の大東京の卅歳以下の男は全部竹竿に提灯行列が行はれた數十萬の參加者で市街は火の海と化し

▼火の流　歡の聲、東京の天地を搖がさんばかりにて非常の盛觀を呈したり、嘗て米國艦隊が訪問の際に受けた歡迎以來斯の如き盛大なる提灯行列は見ざるが恐らくは英皇儲殿下は今まで行てなき盛觀にてあり

▼提灯を吊して行列に參加したり、搖めく赤や黃なる酸漿提灯が街頭に小丘に出沒隱見櫻花と松緑の背景を持ちて大なる繞一巨帶を示めしたり太鼓の音と横笛の音に和せる万歳の大聲は日英親善を心から祝ふが如しに相違をからん、事實上東京の人は全部竹竿に提灯を吊して行列に參加し

▼火の流　歡の聲、東京の天地を搖がさんばかりにて非常の盛觀を呈したり、嘗て米國艦隊が訪問の際に受けた歡迎以來斯の如き盛大なる提灯行列は見ざるが恐らくは英皇儲殿下は今まで行てなき盛觀にてあり

◆復活祭＝明日の各教會

桑港基督教會の昇天祈禱會當夜は四教會聯合禮拜說教

＝復活祭の餘興は別の日に＝

明日は基督の復活した日として各教會で夫々壯嚴な祝賀禮拜說教が催されるのであるが既に當市サター街の青年會では九日より十六日まで「聖なる週」として

▼復活祭の當日迄でをストーブ爾士其他の諸氏の講演や祈禱式同十時から日曜學校同十一時半よりブキャナン街とポスト街の角にて青、少年のための集會を開き八時より同所にて基督傳の活動寫眞二千呎の映畫を一般に見せる筈である又桑港基督教會の

▼十六日の復活祭當日は同教會三階の見晴らしの宜い一室で未明の頃に一同參集し遙かなる東方より太陽の地上に昇る行を待ち昇天祈禱會を開き午前七時には子供の日曜學校併に大人の聖書の組はイエスの復活に關する

▼聖句を學ぶ事となつて居る更に聖公會では午前七時に聖式同十時から日曜學校同十一時から「イースター禮拜說教」のため特に米婦人のオルガニスト及びヴイオリニストが來て特別の音樂があり夜は活動寫眞が子供のために行はれる其他美以教會

▼講演が　ある天主公教會、教會、聖軍、ラフォーム教會でも同樣に說教や祈禱日曜學校等の催しがある殊に當夜は當市の桑港基督教會、リフォーム教會、美以教會の四教會の聯合聖公會、美以教會の四教會にて午後八時から白人の四部合唱同胞の邦樂演奏等の

▼催しが　擧行され森、田嶋兩特師の講演がある筈で復活祭としての本當の祭日的餘興等があるのは各教會で十六日以後に夫々便宜の日時を選んで催されるる趣きである

◆排日提議

四箇條

世界一週旅行を了へて歸米した

▼フエラン氏　布哇を振出しに日本支那マニラ印度の順序で世界一週旅行を試みてゐた加州排日の巨頭前上院議員フエーラン氏は

▲其の旅行　を了へ紐育に着いた『布哇の日本人は非常な勞ひで增加して居るのは米國に對する脅威である』と在の外

▼排日土　地法の如き法律は己に六州に於て制定されて居る聖公會、美以教會の四教會の聯加州外人土地法の困難なる此法律が常に緊張强化されなければならぬ點にある、而して此れが全く米國政府に賴らねばならぬ點である、吾等の排日目的を完成せんがために全米國に排日教化を行はねばならぬ』と

●ハレルヤ娘子軍

戰場實驗談

佛國戰場ローマンス

今夜救世軍にて

三十餘名にて編成せる救世軍女士官の一群は今夜七時半當市グリーリー街とブナナ街の救世軍會館に於て佛國戰場に於ける

▼實驗談　を試むべく近來珍らしき興味ある會合なり辯士は中校シエルドン鏢、少校ラブソン鏢、大尉マカリスター鏢等にて何れも純潔なる若き女性ながら銃煙彈雨の修羅の巷に戰士を慰問せる女丈夫達である、當夜彼等は戰場の服裝にて登壇すべし、悲觀病、失戀自殺、痴情兇殺などのいまはしき事件續出する中校懇切に通譯すべし

●全米國に

排日教化

加州檢事總長之れを力說す

選擧が近いて來たので加州大小の政治屋が忙しく運動し始めた、加州檢事總長ユー・エス・ウエッブ氏は一昨日パレース・ホテル內パブリック・スピリット倶樂部に於て左の如く演說をした『日本人は加州の

▼富裕なるを知つて他日全然自分の所有物になるんと努めて居ても、加州人は州內に異人種を入り込んで住居する事に意を留めて自己保存のために黃色人の加州來を拒否せねばならぬ私は日本に同情する者であるが多數の日本人が加州以外の地に移住せん事を望む者である、日本人をして米國の旗下でなく自分の國々旗の下に發展せしめよと云ふが私の考へである、千九百十三年制定の加州

●加藤大使

松山市長

に選擧さる

特別全權大使貴族院議員加藤恒忠氏は今回愛媛縣松山市長に選擧された

（昨日着本社東京電報）

▼排日土　地法の如き法律は己に六州に於て制定されて居る聖公會、美以教會の四教會の聯加州外人土地法の困難なる此法律が常に緊張强化されなければならぬ點にある、而して此れが全く米國政府に賴らねばならぬ點である、吾等の排日目的を完成せんがために全米國に排日教化を行はねばならぬ』と

●ハレルヤ娘子軍

戰場實驗談

佛國戰場ローマンス

今夜救世軍にて

三十餘名にて編成せる救世軍女士官の一群は今夜七時半當市グリーリー街とブナナ街の救世軍會館に於て佛國戰場に於ける

▼實驗談　を試むべく近來珍らしき興味ある會合なり辯士は中校シエルドン鏢、少校ラブソン鏢、大尉マカリスター鏢等にて何れも純潔なる若き女性ながら銃煙彈雨の修羅の巷に戰士を慰問せる女丈夫達である、當夜彼等は戰場の服裝にて登壇すべし、悲觀病、失戀自殺、痴情兇殺などのいまはしき事件續出する中校懇切に通譯すべし

▼現肚會　に投ずる清涼劑たるを疑はず同胞男女を問はず

◆三宅を敗る

サンテルに三回勝負で

ポートランド市で日本の三宅太郎對アッド・サンテルとの撲が十四日の夜行はれ三回勝負で一時間揉み合つたがサンテルは常に攻勢を取つて三宅を敗つた

●賭博から拳銃殺人

五人の同胞組が

昨早朝沙港ユー橫（？）なる商店經營者がヨケタソン街の自店に入らんとせしとき待構へ居た五人の同胞に射殺され同人の體には十個彈丸入り居れり目擊者の語る所によれば五人の男はストリートの向側に並んでゐたが橫が月を開くや否や警告もなく突然發砲したのであると加害者は逃走委を隱したが警官の說では射殺の原因は賭博から起つたのであると（昨日沙港發電報）

◆愈々廿五日に開廷

五名の證人出廷確定

ターラック同胞放逐事件

在留同胞の耳目を聳動せしめたる一樣交涉中の所前記五氏は何れも出廷の旨十四日モデスト相原日會幹事より在日會へ通知があつた

在日領事館より一名在日會主地係や軍警部と共に同地へ出張の筈である話事件に關しブランシ檢事は同胞の證人として出廷する事を希望して再三斡旋矢張領事も打合せを爲した稿であるから若し同胞の證人は是れ迄證人として出廷し居る樣領事の爲めに盡されて居る

●在日參事員會　來る廿九日午後二時より開催の在日會定期總會に附議さるゝ協議事項左の如し

一、各部委員會議並に報告
二、在留民登錄並に報告
三、する給料登錄決定案
太平洋郵船會社關係
（一）東京支部各種問題
（二）提出議案
（三）代表者選定
教育部委員會議定實行案
農事部委員會議定實行案
時間問題問題
役員補缺
（一）新聞雜誌廣告（二）其他

◆蟹減稅運動は既に遲きか

委員の意見區々

野崎商會支配人小竹法經氏は商業會議所から

▼蟹減稅の輕減運動を委託されたので華府へも行きましたが各方面の人に逢つて意見を叩いて見ると區々で吾々當業者の採る防衛の運動などに就いても或者は是非でよいと云つてゐる又財政委員會の人々すらも殆んど無つた意見を以てゐませんでした今後も運動を繼續するか否かは云ふこゝは相談の上で決定しやうと思ひます』

◆雨と傘

（二）

どうだ此城の天氣は！

山に登つて洋傘の下でピクニックも始よらない

◆三宅を敗る

サンテルに三回勝負で

ポートランド市で日本の三宅太郎對アッド・サンテルとの撲が十四日の夜行はれ三回勝負で一時間揉み合つたがサンテルは常に攻勢を取つて三宅を敗つた

◆ファッグに宛た

祝電の山

＝昨日羅府へ向け出發＝

アーバックルが去る十二日無聊でなつた報道が全米に傳へられたので一昨日は祝電が殺しく彼の宿所ブラサホテル（醜逃げられた）其餘信者の中にはラスキー武本ヨエシ、ラスキー、アルフッコアノルで、メルメルガ、アレース、レーユ等の名が出された、アーバックル夫婦は昨日羅府の實家へ向つて自動車で桑港を出發した

●日米人野球試合

日米人野球試合

サター街基督教青年會少年部野球チーム『火の矢組』は本日午後二時よりノースビーチ・ハバス、スコーヤに於て米人青年會少年野球チームアベックスと試合する由にて火の矢組の陣容は左の如し

CF 2 B 3 C S S B I L F R P

●波斯丸橫濱出帆

其の乘客と載貨

桑港波斯丸は昨日桑港に向つて橫濱を出帆したるが其乘客載貨は左の如し

一等七十一名三等百二十名荷物は綿織物が二百二十三梱生糸及び絹織物二十九噸雜貨十三噸其他合計二千四百十一噸にして此內東都行貨物四百八十四噸にして內譯は紐育行百七十五噸費府行四十二噸ニューオルレヤンス市行四十三噸

●旅館組合野遊會

本日ロアルトへ

桑港旅館組合の野遊會は愈々本日ロアルトに於て開催せらるゝ家族同伴で自動車でロアルトに出掛けるのである本日は各組合員は全部休業して日頃の骨休みを充分爲す筈で可なり脫線もする事だらうが豫定の如く午前八時半サウス・パークに集合し記念撮影後同九時出發先方では花散つたと云ふ便りもあるが其變餘興や福引競技でアット云はせる心組だと

●衣類財布盜まる

桑港市ハイド街二一一七の地下室に住むハリー福田は一昨日同人が所用にて外出中何人か器具を用ひて室の戶を押し開け室內にありし同人所有の鼠色の夏服一着褐色の冬服一着五弗入の革製財布一箇靴一足等時價四十餘弗の物を盜み去つたと昨日警察に屆け出た

●市場監督委員會　佐市に於て開催の第二回市場監督研究委員會は關係事項未了の爲め延期中の處愈々來る廿九日午後二時よりサンノゼ日會事務所に於て開催の事に決定し十四日在日會農事部より各委員宛通知狀を發送せり

●學園委員會　本日午後七時よりサター街本語學園に於て北加學園協會委員會を開會し曩に南加同會より返送し來たる新教科書錦一二卷政訂の件を議し三四五六卷の檢閱を爲す筈なり

●無線電話の說明　本日午後六時頃よりサター街青年會にて小谷英雄氏の無線電話に關する說明併に試驗あり

●大村氏寄附　湯浅商會支店支配人大村莊治郎氏は今回夫人死亡せしため天主公教會及び同教會附屬の學校幼稚園へ金四百弗寄附せり

●學生會文學會　當市學生會には文學會を本日午後八時半より開き野中寬一氏の演說ある筈

●銀洋丸ポ港着　銀洋丸は十三日午後七時ポートランド港着

天下一品
印醬、味噌は申すに及ばずウトシ米も迅速に配達に應じます
電話ウエスト三二八六　天商會
1534 Post St., S. F. Calif.

森山寫眞館
番地サター街一七九
電話ウエスト六二五一

送別會廣告
本組合理事同　川口三次郎氏　伊藤唯一郎氏
來る五月初旬大洋丸にて歸國せらるゝに付き來る四月十六日（日曜）午後五時グラント街大三一遠東樓に於て送別會開催致し候間萬障を排し御來會被下度候
四月十四日
洋服洗染業組合

御祝儀　佛事用
菓子司
富士見屋
桑港ラグナ街一六〇八

シンガーミシン
桑港ポスト街一八〇七
みとま
電話ウエスト七三六三　フキルモア一九八七

かまぼこ
製造卸小賣
特に御贈答品は御注文次第調製
並に鮮魚食料品一切
金門商會
桑港グリー街一五二九
電話ウエスト四三七九

御祝儀
御佛事
御菓子
桑港ポスト街一六九九
御菓子司　松屋
電話ウエスト五三六六

グリー街一五〇九
電話ウエスト八七五五
谷靴店
斬新流行
新荷到着
婦人靴部
販賣部
大勉强

御祝、佛事用
御菓子司　勉强堂
桑港グリー街一五三三
電話ウエスト七五二七

B
御祝、佛事用
御菓子司　勉强堂
卸小賣
桑港グリー街一五三三
電話ウエスト七五二七

マクリー石油株式會社
總代理店　デノーコンパニー
事務所桑港カリホルニヤ街二四二電話ガーフキルド三一六〇
日本人部總支配人　佐伯重秋　南加總代理　兒島正義

新開業
牛すき、御飯
桑港ラグナ街一五〇〇
電話架皮中
いろは

小田運送店
ポスト街一七七六　電話フキルモア四六一
上等婦人帽子　特別勉强
等

ニュー・ウエスト・ホテル
桑港ポスト街一八二四
電話ウエスト八三九六
輸出卸小賣　部谷自轉車商會
（住宅電話）ウエスト二四四〇

各最新式（モーターサイクル、自轉車（小供乘物車並に附屬品一切）販賣修繕
種
桑港市ポスト街一八二四　電話ウエスト八三九六
各室內に湯水入浴の設備有
桑港ヌネー街八百三十三番（電話ガーフィルド三六〇）

▲新派晴友會
▲新派連鎖劇
加州
歌劇
桑港興行會社
第一活動寫眞部　辯士　秋田遊民
第二活動寫眞部　辯士　秋山みどり孃
第三活動寫眞部　琵琶入辯士　松葉美佐子
支配人　奥吉
定吉
電話ウエスト八七六八
申込所　桑港グリー街一五〇五

青木譽志夫一行
辻岡風波
秋田遊民
松葉美佐子

著書名
巖谷小波　小波お伽大全
田山花袋　淺春
ヂユマ原著　モントクリスト伯爵
廣津和郎　光と千鶴子
碧瑠璃園　堀部安兵衛
中里介山　清澄に歸れる日
宇野浩二　迷へる魂
田中王堂　創造と享樂
生方敏郎　三都見物
賀川豐彥　死線を越ねて
同　太陽を射るもの
芝染太　米國の俚言と俗語
山崎貞　ABCの讀方より
米國聖書會　英和對照新約聖書
印刷局職員　錄

定價
一、〇〇
二、〇〇
一、五〇
一、五〇
一、七〇
二、八〇
二、三〇
二、八〇
三、〇〇
二、八〇
一、〇〇
一、五〇
一、六〇
三、〇〇

株式會社
よろづ商店
1300-4th St., Sacramento, California

醫科大學專門教授紹介並に通辯、大學病院入院及び大手術監督等遺憾なく懇切に取扱申候
桑港ブキャナン街一六四四
電話フイルモア四六二
門野普光
T. G. Nacayama L. B. 1562 Webster St., S. F.

中山法律事務所
電話フキルモア二一九一一

カ子正味噌糀
藤本商會
桑港ポスト街一七一五
四一〇
電話カキネ二三三九

太田商店
一日十仙
シンガーミシン
桑港ブキャナン街一七一五
電話ウエスト四〇三七
ムスケッチ……五仙ヤード

大河原法律事務所
T. Okawara Hearst Building San Francisco, Tel. Sutter 3127
電話ウエスト九三七一

和洋食料品雜貨
株式會社新亞細亞商會
桑港ポスト街一六九五
電話フキルモア一二七九三

復活祭
桑港基督教會
桑港ブキャナン街一六〇一
電話ウエスト四三七一

再開業（四月廿日より）
藤井理髮館
理髮師入用　藤井榮
桑港ブキャナン街一六〇一

賣
大安
金物一切
大工道具
ケッチン道具
日本土產各種
土屋商會
桑港ポスト街一八五五

吉里寫眞館
桑港フイルモア街一四三七
電話ウエスト八六五〇

原田寫眞館
桑港フイルモア街一六三三
電話ウエスト六三六〇
（ポストセンター の間）

パナマ靴商會
桑港ポスト街一七一七
男女特製靴小供靴各種
桑港ポスト街一七一七
王府ランドセル街一八三五

日米

ロスアンゼルス（十三日）

商議役員會

▲副會頭補缺に赤星氏　南加日本人商業會議所四月定期役員會は十二日夜同會議室に於て開催左の諸件を決議した
一、副會頭高橋昇之助氏辭任に付き補缺として赤星一次氏を滿場一致推薦
二、光勢評議員篠國に付補缺として利行富二氏を推薦
三、ホテル業者組合より目下繪出しつゝある標榜領者制裁に付懲戒依頼の件可決
四、羅府日本人洋食店組合より後援依頼の件可決
五、五月廿四日より當市に開催さる沿岸協議會代表者歓迎は會員一般的晩餐會開催可決
六、會員募集の件は募集デーを定め役員大擧して勧誘可決

年収一萬弗

▲事業家は殆んど全部當市個事館には一ケ年一萬弗以上の収入者を來る二十日まで調査報告するよう各日會に依囑しある旨が目下羅府日會に於ては會員に向つて方勧誘中なるが一ケ月八百弗の総収入者の擧て事業家は殆んど大半此の報告者の部類に入るべく往年は五千弗以上なりしも物價の低かし却の各商店にても一ケ年五千弗の賣上は其數も餘りに多からざりしが近來物價の高騰せると各種日本人事業の發展とに依り一萬弗以上の事業家數は甚だ多數となりしも年々届出づるもの極めて少なく困却し居る由にて届出づるとも何等不利益となる事なければ一般事業家は届出づる様されたしと

育兒週間

當市にては來る十七日より一週間を育兒週間と定め一般母親に對し育兒上柳々なる注意を與へんと企て母親啓發協會二十八支部の八々に努力する筈なるが月火の兩夜は殊に育兒法に關する活動寫眞を母親一般に供覽し更に又ドクトル・ワイルド氏主任で多數となりしも年々届出づるもの極めて少なく困却し居る由にて届出づるとも何等不利益となる事なければ一般事業家は届出づる様されたしと

自由公債拂戻

戰時中米國政府にて募集せる自由公債に應募し中途にて支拂を止めたる人々に第三回は十二弗卅七仙第四回は四十三弗卅五仙第五回は五弗以上の拂込に對しては割戻しとなり居るを以て正金其他銀行に對し應募せる人にて中絶せる人は各申込所に問合はさしたし

▲給料最低廢更　加州公益委員會にては過去一週間確定の結果從來工場に就働する婦人及び未定年者の給料最低十六弗を一弗引下げ十五弗となしたりと

▲上町倶樂部總會　上町に於ける日本人倶樂部にては十五日午後八時第二學園に於て總會を開き役員改選其他の協議をなす

▲市講演會　中央日會にては

五月十三日十四日の兩日サンタモニカ及オクスナードの兩所にて講演會を開催由

●岩城氏の歸羅　昨年旅館組合第三回觀光團を伴ひ歸朝した岩城德藏氏は今回新夫人同伴再渡米十一日歸羅せり

日蓮教會主催

▲釋尊宗祖降誕奉祝　來る十六日（日曜）午後二時半より奉讃式典を當市日蓮教會に於て執行後は六時半より北アンジェロ街羅府青年會館に於て紀念講演會を開催する由にて當日のプログラムは左の如し

奉讃式　司會者
紀念講演會　司會者
講演　松本光
鳴呼二聖の降誕　加藤靜男
文底秘沈の傳教　遠山隅教師
餘興は筑前琵琶、義太夫、劍舞及び琵琶獨等あるべしと

●山谷鳴海氏北加行　羅府海產鑛詩會社重役山谷次郎藏、鳴海重太郎、ハリス三氏はモントリー灣の海產業を視察し沿岸及び中北加方面に於ける同社製品テンプラ・ハンペンの市況を視察する筈なりと

●寒風吹荒む　春を過ぎ早や初夏の時期に入りし今日此頃シラマヂレの連山は新に白雪を鏤詩會社重役山谷次郎藏、鳴海重太郎、ハリス三氏はモントリー灣の海產業を視察し沿岸及び中北加方面に於ける同社製品テンプラ・ハンペンの市況を視察する筈なりと

●寒風吹荒む　春を過ぎ早や初夏の時期に入りし今日此頃シラマヂレの連山は新に白雪を鏤ぎ日中六十五度夜間の最低温度四十度内外と云ふ正月頃後に於て日

サクラメント(十四日)

贋造紙幣を正金と兩替

▲詐欺的奸策の擧圖人

近來當市日本人區域に贋造紙幣を携帶し廻はり小錢の入用な風を裝ひ正金と兩替を頼み詐欺を働く墨國人あり其奸計に陥りたる同胞營業者一二に止らざる如し一昨夜も當市エル街の佐伯某に一墨國人入り來り十弗紙幣を取り出して兩替せんことを求むるや妻君風何心なく好意的に交換しやりしに主人歸宅後取調べ見れば一弗紙幣の四隅を切りぬき巧妙なる細工にて十の數字を表はし實物らしう見せかけし贋造紙幣なりしとのこと斯る詐欺的行爲に乘せられぬやう一般の注意が肝要なるべし

井高撰一出獄す

●廣島縣人役員會 當市北加廣島縣人會にては來る十六日の日曜午後八時より第四街の同會事務所に於て役員會を開催すと

●結婚 アイルトンの農業家廣島縣人松田牧太郎氏の從弟爲數氏の縁疑にて歸朝中日本より押送され當市郡監獄に入牢中なりし沙市の仲買商井高撰一は五千弗のハウスボンドに減額されて昨日出獄したる由なり

苺組

●浮浪漢退治 昨日は當市警察署員總出で浮浪漢退治を遂り四十一人を拘引取調べ指紋を取つた上市外に退去を命じた近來はのハウスボンドに減額されて昨日出獄したる由なり

●不穏野球試合 本社主催の野球爭覇戰も旬餘に追つて來たる十六日午後一時から櫻府で試合する不老林對櫻府の野球戰は最終の雌雄試合であるから當地方からも其武者振りを見物に出掛ける筈にて居る好球家が澤山ある模樣だ

●櫻府旅館組合 既報の通り本年の苺苺商組合は實に未曾有の好況を示し昨年の今頃は一噸四十五弗位なりしものが今年は七十五弗以上で賣手が押すな押すなの有樣で苺苺造りの鼻の高い事はに話しにならない夫れでも七十五弗から百廿五弗位迄で契約濟みの分で既に千五百貨車に及んだとの事だが是れから先き天井知らずの相場を夢想して賣り惜んで居る者が多數を占めて居る

●苺苺千五百貨車賣約 昨日は當市警察署員總出で浮浪漢退治を遂り四十一人を拘引取調べ指紋を取つた上市外に退去を命じた近來はの流車の嗜だ乘りやめかと増して旅行者の不安を訴ふる者が多數であるから此事に出でたのである

●浮浪漢退治 昨日は當市警察署員總出で浮浪漢退治を遂り四十一人を拘引取調べ指紋を取つた上市外に退去を命じた近來はの流車の嗜だ乘りやめかと増して旅行者の不安を訴ふる者が多數であるから此事に出でたのである

●櫻府旅館組合 既報の通り本年の苺苺商組合は實に未曾有の好況を示し昨年の今頃は一噸四十五弗位なりしものが今年は七十五弗以上で賣手が押すな押すなの有樣で苺苺造りの鼻の高い事はに話しにならない夫れでも七十五弗から百廿五弗位迄で契約濟みの分で既に千五百貨車に及んだとの事だが是れから先き天井知らずの相場を夢想して賣り惜んで居る者が多數を占めて居る

苺苺

●不穏野球試合 本社主催の野球爭覇戰も旬餘に追つて來たる十六日午後一時から櫻府で試合する不老林對櫻府の野球戰は最終の雌雄試合であるから當地方からも其武者振りを見物に出掛ける筆にて居る好球家が澤山ある模樣だ

櫻府旅館組合

●櫻府旅館組合 昨日は當市警察署員總出で浮浪漢退治を遂り四十一人を拘引取調べ指紋を取つた上市外に退去を命じた近來はの流車の嗜だ乘りやめかと増して旅行者の不安を訴ふる者が多數であるから此事に出でたのである

The Prince of Wales' Visit to Japan.

THE Prince of Wales, most popular in world society, is in Tokyo, the guest of the Japanese Imperial Family, said The Japanese American News in Japanese last Thursday.

This is the best season of the year in Tokyo. The country is resplendent with the cherry blossoms for which Japan is famous. The people, not only the Japanese aristocratic class, but all classes, are in a peaceful and festive mood. The blossoms seem like an immense cloud, and the great masses of the people, good natured and happy, will share in the prince's entertainment.

Considered in a more formal aspect, the Prince of Wales is in Japan to return the visit of Crown Prince Hirohito to England last year, and it might be regarded as the private affair of the Japanese Imperial Family. But the people of Japan see in this visit a precious opportunity for a unification of the new Japan and England, and it gives them joy.

There exist in Japan various shades of discontent and anxiety, fruits of the world war, despite the traditionally peaceful life the people heretofore have enjoyed. There may be, perhaps, some few who secretly hope for revolution, but the great majority of the people desire to keep the emperor at the head of the national life. Perhaps it would more clearly express their feeling to say they expect the imperial family to lead the people in a reformation of Japan's social life. The people are wishing for a greater change than was ushered in by the Meiji era.

In this regard, the great Meiji Emperor and the prince regent are in about the same situation, and as the people remember the greatness of that monarch they set just as high expectations upon the young crown prince. The people are not blind. They have seen great possibilities in the crown prince, great bravery in his firm resolve to break down customs old and undesirable, making way for the dawn of a new era following his world tour of last year. His popularity is universal in Japan, and he enjoys the intensest confidence and sympathy of the people.

There can be no doubt that a new era in Japan is in the making, and the progression toward this new era is led by the Imperial Family.

The tour of Japan made by the late Meiji Emperor when he ascended the throne broke down the walls of the old feudal system and united the nation as one man. That event enables us to understand the world tour of the crown prince, which was without precedent. He was the herald of a new order of things which is destined to make of Japan a world power in every sense and break down the old and narrow, self-centered idea of the Japanese of yesterday. The imperial household of Japan is taking its pattern from that of the British rulers as a first step toward adapting itself to the new order of things—the era we all are expecting to witness soon.

The plain truth is, the British royal family has dedicated itself to work and adaptation to the monarchism of the future. They do not know what form this monarchism will take. The relation of the royal families of Japan and England is not therefore that of tutor and pupil, but each must learn from the other its true worth. Really, the two families are as two brothers, each assisting the other whenever the necessity is seen.

Once the great Emperor Meiji accepted General Grant as his tutor in political affairs and learned from him the secrets whereby a modern government rules a country. Quite different is the relationship of the Crown Prince of Japan and the Prince of Wales.

It is unnecessary for us here to mention the fact that the national constitutions of Japan and England are unlike. The forms of government, however, are very nearly alike. Diplomatic relations are close and there naturally exists a warm sympathy between the two nations. While the Anglo-Japanese alliance is out of existence, the two governments are just as friendly and cordial in their relations as though they actually were allied. They both have come to the critical time when the building of a new monarchism is necessary.

Considering all these circumstances, the visit of the Prince of Wales is not the private affair of the Imperial Family alone, nor is it a formality, attended with much pomp and circumstance but lacking in practical value; it has a far deeper significance.

The Japanese reception committee realizes how times have changed, and has been governed accordingly. Its program for the entertainment of the Prince of Wales makes him not only the guest of the Crown Prince of Japan, but also the guest of the Young Japan as a whole. This is a radical departure from what formerly has ruled on such occasions. If this custom shall be carried on in future, it will go a long way toward educating the great masses of Japan.

The Diet and Army Reduction.

Following is a translation of an editorial recently published in Yomiuri, one of Japan's greatest newspapers:

IN THE LAST SESSION of the Diet, all the political parties in the House of Representatives proposed to the government that the term of active service be reduced to sixteen months, and that $20,000,000 be lopped off the annual army expenditures.

At the same time they passed a memorial to be presented to the government in regard to the appointment of civilians to the post of ministers of the army and the navy. It is rare in the history of our parliamentary government that the Ministerial and Opposition parties thus have taken concerted action and unanimously made such propositions to the authorities. Particularly, when we take into consideration the fact that the Ministerial party contested with opposition parties on other important questions, such as universal suffrage, with unprecedented vehemence in both houses of the Diet throughout the session under review we consider it wonderful that they jointly acted with reference to the question or army reduction alone.

This is none other than the result of the recognition on the part of various political parties that, consumed by the desire for the furtherance of their own power and influence as they are all the time, they had no alternative but to yield to the trend of the general situation in the world and popular opinion at home.

We are dissatisfied with the absence of a particular idea and object in the memorial on army reduction placed before the authorities by all political parties, it being compromising and calculating in character and far from comprehensive and drastic in the scale it proposes. Nevertheless, we can not help feeling more or less satisfaction with this step taken by the House of Representatives, taking it as a proof of the victory of our public opinion over party politics and parliamentary government.

But what puzzles us in connection with the question is that, as Mr. Wakatsuki of the Kenseikai questioned the premier in the House of Peers some time ago, the government ought to have demonstrated its determination of carrying out army reduction since the Seiyukai, the Ministerial party, passed the proposition for it with its majority vote in the House of Representatives. Also the party should have proposed it with a firm resolve for making the government comply with and put it into practice. However, the premier made responses to the interpellations advanced on the question in the Upper House in a nonchalant fashion. Such an act of Viscount Takahashi, who is at once the president of the Seiyukai and the premier, causes us to believe that he is carrying two heads under a hood.

At the same time, we cannot do otherwise than think that the Seiyukai proposed the retrenchment of our land armaments in the House of Representatives with the sole object of getting into the favor of the people, thereby deceiving itself as well as others. The Kenseikai and the Kokuminto, which acted in concert with the Seiyukai regarding the question, can not escape the charge that they were deceived by the latter should they do so without the existence of the relationship of this sort between it and the government.

On the other hand, the war minister expresses opposition to the contraction of the terms of conscription and the reduction of military expenditure as memorialized in the Lower House. This indicates the relation of the Cabinet with the army authorities concerning army reductions. In other words, the utterance of the war minister conveys his determination to object to the cutting down of our present military strength backed by the power of the militarists and even at the risk of his own post.

The government is being pressed between political parties that stand on the side of the people in order to make themselves amenable to public opinion and the militarists who still hold a strong power behind it. And it is also noticeable that there is a different element in the person of the war minister, representing as he does the militaristic clique in the Cabinet itself.

The factors in the question of army reduction in the future, therefore, are composed of the Diet, the government and the militarists. Our people must give hearty encouragement to the Diet so as to let it support the government in its contention with the militarists. The people do not in the least mind whether the fight with the militarists is conducted by the Seiyukai ministry or any other so far as the question of army reduction is concerned. The political parties in the Diet have given a pledge to the people for the reduction of the army through their proposal for it presented to the government in the last session, and they cannot violate it on any account.

THROUGH HORNED SPECTACLES.

By AGNES S. DORAN.

IT was with no small amount of trepidation that we rang the door bell on this our first visit to a Japanese lady in her own home. Of course, the outside of the house seemed American enough, situated as it is on New York's West Side, but we knew that beyond the well-polished door knob were sliding panels, heavy incense, and noiseless servants who appeared suddenly from unexpected retreats. Our surprise—and relief—was enormous when our hostess herself, a dainty little figure in a gorgeous red kimono, threw the door wide open and welcomed us into a home resplendent with flowers, sunshine and comfortable American chairs.

We were grateful to see those chairs, because we had not anticipated with any keen amount of enjoyment two woolen clad legs sound asleep on a mat.

Before we settled ourselves for the main ceremony of the afternoon—tea drinking—our hostess showed us some things of interest in her house. She walked a little ahead of us with that hobbling gait peculiar to Japanese women, which we had always thought was the outcome of many years of foot pinching, but which, we learned, is not at all because of tight shoes, but is the symbol of complete modesty. The Japanese girl spends years in acquiring this manner of walking. She also cultivates the slight stoop, which we had always noticed, because to hold the body erect, as we in America try to do, is by no means the essence of grace in Japan.

HOSTESS SERVES TEA.

After our tour of inspection, when we had seen incense burners of three hundred years ago, wood cuts five hundred years old, and some priceless cloisonne, our hostess made tea. She served it, and in spite of the presence of servants in the house, she waited on us herself. This is the greatest mark of respect a Japanese woman can bestow on a guest, and the constant giggling and bobbing which accompanied the service—which accompanied everything, in fact—was not, as perhaps we at first believed, an imitation of our American "flapper," but was just Japanese politeness. Constant cheerfulness in women is the demand of good breeding in Japan. Between the giggles, or during them, we chatted, our hostess saying "yes" when she meant "no" and "no" when she meant "yes." We were getting along beautifully, learning all about the almost complete lack of higher education for women in Japan, when the men of the house arrived.

The little lady of the kimono subsided immediately. A woman in Japan speaks only when spoken to whenever men are present. We, resenting the newcomers at once when we saw what an effect they had, offered our hostess a cigarette. She giggled her refusal. Her countrywomen do not smoke until they have passed the age of forty or forty-five. In obedience to the request of one of the men, she produced her "samisen," which rather resembles a banjo in appearance, but in sound is, to our Western ears, about as musical as a jewsharp.

She strummed with a large flat piece of ivory, and we were startled to hear the low sweet speaking voice change to a strident wail as she sang for us the "Kokapi." We did not understand the music, but it was novel, at least, and we did not mind it. What we did mind, and what spoiled for us the whole visit was the arrival of the men, and the woman's position which their coming disclosed.

WOMAN IS SUBSERVIENT.

In Japan a woman is brought up entirely on the "good-wife-and-wise-mother" doctrine, and under this Spartan-like training she becomes completely subservient. She cannot hope for economic independence, for, even if there were positions open to her, she has never learned a trade or profession. She may write poetry, but the Nara period is past, and few women in Japan today distinguish themselves in belles-lettres. She cannot even bob her hair, unless she is a widow, in which event she may cut off her tresses, and place them in the coffin of her husband as a sign of her perpetual faithfulness.

Worse than no job, no bobbed hair, and no cigarettes, our Japanese sister has absolutely no chance for membership in the *Lucy Stone League*. Far from keeping her own name, she must at marriage renounce completely all her relatives. This custom, we admit, would have its good points, were it not for the fact that in so doing she automatically acquires all of her husband's relations, including, and especially, the mother-in-law. We say especially the mother-in-law, because that lady remains the head of the household to which the little bride is brought and in which she must become not only an obedient wife, but also a very obedient daughter-in-law.

We were interested to learn that many of the young people nowadays are breaking away from this custom, and are beginning married life in homes of their own, but even then the position of the woman is improved very little. How can such a progressive government as exists in Japan still show such a chronic reluctance towards the higher education of women? Surely, they are worthy of education. Such well bred, intelligent, tactful persons could not help but grace any circle.

A PAGODA OF PEARLS.

A PEARL pagoda, about two feet high and made entirely of Mikimoto culture pearls and mother-of-pearl except for tiny silver wind bells, is the central exhibit of the Mikimoto display at the Tokyo Peace Exposition. "The pearl pagoda is a product of Japan," says Mr. Mikimoto.

The pagoda, which is five-storied and follows the conventional style, is a thing of beauty. The walls and the tiles of the roof are made of mother-of-pearl, as is the square base on which it stands. Round culture pearls are used as decorations, while an 80 gram pure white pearl tops the structure, from which ropes of pearls descend to the corners of the upper roof. The "sands" around the base consist of thousands of large and small culture pearls. Inside the pagoda on a tiny stand is a pink pearl, weighing 138 grams and believed to be the largest in Japan.

The pagoda is a marvel of delicate workmanship, the entasis of a true pagoda being shown in the lines of the roof. There are, in addition to the two exceptionally large pearls, 1,195 large pearls in the pagoda structure, 285 on the little fence which surrounds it and 1,500 in the "sands" at the base, which also contain 120,000 small pearls.

JAPAN PUNISHES GRAFTERS.

PRISON sentences ranging from two months to two years were pronounced against officials and former officials of the government of the nation, city and perfecture by the Tokyo District Court recently as the final chapter in the story of municipal graft unearthed when the roadway leading to the Meiji Shrine collapsed more than a year ago. One of the seventy-one men indicted was declared innocent. Bribes involved amounted to about a half million yen, and the defense employed 135 attorneys in fighting the charges.

The collapse of the Meiji Jingu approach at the time of the dedication of the shrine was but the first episode in the wholesale graft uncovered, which spread to other public utilities, notably the gas works. Viscount Takajiri, although considered innocent himself, resigned his position as mayor of Tokyo, being followed in this course by numerous other officials of the city and prefectural government.

THE STIRRING BATTLES OF KOKUSENYA.

By Chikamatsu Monzayemon.

CONTINUED FROM LAST SATURDAY.

CHAPTER III.

UPON the arrival of Kokusenya and his parents in China, they found the Tartars had completely overrun the empire and taken possession of the government.

Unable to discover what had become of the old friends of Tei Shiryo, finding no one who could tell them whether General Go Sankei was living or dead, they were at a loss what to do. How and from where could they gather together the few remaining adherents of the Ming dynasty?

Following a great deal of delay and consultation, they determined to ask Kanki, a potentate of China, to assist them. In happier days, when Tei Shiryo had lived in China, he had a Chinese wife who had died, leaving him an infant daughter. When he had taken passage to Japan he had left the baby in a nurse's charge.

Now the old gentleman was delighted to learn that his daughter was grown to young womanhood, the wife of General Kanki, who was the lord of a province and the possessor of a fine estate. Kanki formerly had been a retainer of the Emperor Shiso, but was now a powerful officer of the king of Tartary.

A BIT OF DIPLOMACY.

It seemed to Tei Shiryo and Kokusenya that the best thing they could do would be to try to persuade the general to espouse their cause. Accordingly they set out for his estate, "The Castle of the Lion," which was about three hundred miles distant.

If they three went together, they concluded, the suspicion of the people would be aroused. So they determined to travel by different routes and to meet at the foot of Mount Sekiheki, near the general's castle. Tei Shiryo was to journey alone, while Kokusenya and his mother were to go by way of the famous Senri-ga-Take. They set out their respective ways.

While they were traveling through a vast bamboo forest, Kokusenya and his mother lost their way and could not determine which direction to follow. Their dismay was heightened when they heard a confused sound, the beating of drums mingled with cries and trumpet calls. They stopped and listened in alarm.

After a time the wind rose and sand began to fly. Leaves were shaken from the trees. The next moment a great tiger came hurtling through the air, clearing the thicket.

Kokusenya, far from frightened, acted with the swiftness of the lightning. He placed his mother behind him and set himself to fight the beast with his bare hands, determined not to use his sword. Glaring and roaring, the tiger sprang at him. Kokusenya fell to, striking the beast with clenched fists, pulling its tail, leaping on its back, practicing the art of *jujitsu*.

AN UNEQUAL COMBAT.

Despite the tremendous strength and catlike agility of the great animal, it was an unequal combat, for Kokusenya was as quick as the tiger and in addition had the advantage of a cool brain. After a time the tiger whined and bounded away, panting for breath.

The hero's mother ran up to Kokusenya and handed him an amulet.

"We both are Japanese," she said, "and while we are far from our homeland I see no reason in that why the gods of Japan should not protect us."

Taking the amulet reverently, Kokusenya strode over to where the tiger lay exhausted, and held the token before the beast. The tiger drew in its paws and trembled with fear.

While Kokusenya stood thus a large band of Chinese soldiers appeared on the scene. Their captain cried:

"Hi, there! what are you doing? That is our tiger. We have been hunting it in order to make a present of it to the king of Tartary from our lord Ri Toten. Hand over the beast to us instanter? Refuse, and you die!"

TO BE CONTINUED.

HOW TO LIVE TO BE A HUNDRED.

YUBEN, a Japanese periodical, gives the following rules and advice to persons desiring to live to the ripe age of one hundred years:

In the first place take bath in a warm room in the morning. Chew well whatever you eat. Three meals with suitable quantity of vegetables and fruits should be regularly taken. Don't eat between meals. Drink six glasses of pure water each day and bask in the sun as much as possible. Dusty and spoiled air must be avoided. Sleep at least eight hours regularly. Old people want one hour's rest after midday meal. It is preferrable to wear perforated clothes. To keep feet warm is very essential. Wear warm socks and well fitting boots which do not let in moisture. Smoking should be refrained until adultage, it being prohibited for the fair sex. Spirits are somewhat good for the old and weak.

Don't marry under 25 years of age. Good work, good play and good rest are indispensable. Do everything moderately. Above all, you must have a thorough philosophy of life for hardships or unexpected luck. Outdoor work is preferable. It makes your digestion very good. Walking is the best exercise, no weather being unsuitable for it. Take care to keep nostrils, throat, mouth, teeth and gums always clean to prevent infectious disease. You had better consult a doctor once every year. Ventilation is to be well arranged, care being taken to make the temperature of the bed room equal to outside air. If you have exposed yourself to 65 degrees in autumn you will feel no cold severely in winter. Old people are subject to self-poisoning. This is cured by good exercise and labor of body in due degree, because this requires the work of brain and body at the same time and drives away unnecessary idle thoughts. Enough money may be as effective as medicine. Anyway we are confronted with many troublesome affairs and ideas, which are to be got rid of by good work and hobbies. You had better take those pastimes which will be also good in declining years. Music is by far the best. Any handwork can be made an excellent means to kill time. Make things with tools. Work in the garden or in the shop, and you will find there tonics for perpetual youth.

CONFUCIANISMS.

THE Master said: "A sage it is not mine to see; could I see a man of real talent and virtue, that would satisfy me. A good man is not mine to see; could I see a man possessed of constancy, that would satisfy me. Having not and yet affecting to have, empty and yet affecting to be full, straitened and yet affecting to be at ease—it is difficult with such characteristics to have constancy."

* * *

THE Duke of Sze asked Tsze-loo about Confucius, and Tsze-loo did not answer him. The Master said, "Why did you not say to him, 'He is simply a man, who in his eager pursuit of knowledge forgets his food, who in the joy of its attainment forgets his sorrows, and who does not perceive that old age is coming on'?"

* * *

"I do not open up to one who is not eager to get knowledge, nor help out anyone who is not anxious to explain himself. When I have presented one corner of a subject to anyone, and he cannot from it learn the other three, I do not repeat my lesson."

THE ADVENTURES OF KIUCHI HEIZAYEMON

KIUCHI HEIZAYEMON, a retainer, disappeared mysteriously one evening. When they heard what had befallen, Kiuchi's friends searched high and low for him. Eventually the missing man's clogs, scabbard and sword were found. The sheath was bent like the curved handle of a teakettle.

No sooner had Kiuchi's friends made this discovery than the missing man's girdle also was found. The garment had been cut into three pieces.

The search for him was kept up hour after hour, and at midnight a strange cry was heard. It was a voice calling for help.

Looking up, Suzuki Shichiro, a member of the searching party, was startled to behold a strange winged creature standing on the roof of a temple hard by. He called the rest of the searchers around him, and all stood gazing upon the weird figure.

"I believe," quoth one nervously, "that this creature is nothing but an umbrella flapping in the wind."

"Let us make quite sure," counseled Suzuki. Raising his voice, he cried: "Are you the lost Kiuchi?"

THE LOST IS FOUND.

"Yes!" came the startling reply, "and I pray that you will remove me from my perilious position as speedily as possible."

Quickly they set themselves to the rescue. When Kiuchi touched foot to ground he fainted. For three days he remained in a state of coma. When he at length regained consciousness he gave the following account of his strange adventures:

"The evening of my disappearance I heard someone shout my name, not once but many times. Going out, I discovered a black-robed monk, bawling 'Heizayemon!' Beside the monk stood a man of prodigious stature. The face of this fellow was red, his hair was dishevelled and fell to the ground. He clapped a rough hand on my shoulder and shouted fiercely in my ear:

"Climb to yonder roof!"

MANHANDLED BY MONSTER.

"He was forsooth an evil-visaged villian, and I refused to obey. I drew my sword to defend myself, but in a moment he had seized my weapon, bent the blade and broken my scabbard into fragments. Then he roughly tore off my girdle and cut it in three pieces. This done, I was incontinently carried to the temple roof and there I was beaten unmercifully.

"But this was not the end of my misadventure, for after I had been pummelled I was forced to seat myself on a round tray. In a moment I was whirled into the air, and the tray carried me with great speed to many places.

"When it seemed to me that I had traveled through space for ten days, I besought the Lord Buddha in prayer to come to my rescue. Almost instantly I found myself on what appeared to be the summit of a mountain. But in reality it was the roof of the temple yonder."

This supernatural occurrence was attributed to the malice of a Tengu, or woodland goblin.

EDUCATION OF JAPANESE GIRLS.

A MEETING of Japanese women educators has been called by the Imperial Educational Association to be held in Kanda April 24. The purpose of the meeting is to consider various problems relating to the education of girls.

The extent to which girl students are to be allowed to participate in political meetings as a result of the abolition of the clause in the peace preservation law which prohibited women attending political meetings will be one of the principal questions to be taken up at the forthcoming meeting.

Other matters to be discussed include the formulation of basic principles regarding education of women, the extent to which educational establishments of higher grade are to be thrown open to women, and the sort of schools in which the system of co-education is to be adopted.

SHICHISHI ITO.

MANY California Japanese have to signal S. O. S. to Mrs. Sanger.

* * *

THE Genoa economic conference minus American dollars is a sad scene.

* * *

THANKS to the Japanese dancing craze, the Prince of Wales will have a good time over there.

* * *

AT Genoa, France should wonder who were the real victors of the world war.

* * *

DELANO mob has succeeded in putting Delano on the Japanese-American map.

* * *

"MORE than $5,000,000 worth of opium, morphine and other contraband drugs was burned in Shanghai." Seems the Chinese are fond of making bonfires of valuable drugs.

* * *

AMERICA is too small to make General Semenoff at home.

* * *

JOHN D. Rockefeller Jr., under heavy guard, told a New York Bible class that his father applied the principle of sticking to his business and building it up. He didn't say how his father built his business or anything about the price of gasoline.

* * *

"THREE Americans were insulted, abused, shoved, kicked and struck by a mob in the Yoshiwara district." A fine lesson for American adventurers who invade the red-light section.

* * *

WE need a couple of Hughes at the Genoa Conference.

* * *

"THE Russian delegate threw the first bomb at the Genoa Conference." Throwing bombs is the favorite game of the Reds.

BUST OF YONE NOGUCHI.

THE Arts Club of Chicago has presented to the Art Institute a bronze head of the Japanese poet and essayist, Yone Noguchi, by the sculptor Alfeo Faggi of Chicago. The portrait, remarkable for its character delineation, gets the aspects of the poet's face, which are most difficult to express in mere physical form. Faggi does this by a certain exaggeration of the most characteristic peculiarities of the features, a protrusion of the upper lip, a thinness of the nostrils, the oriental arch of the eyebrows.

The sculptor is an Italian who received in his native country an entirely conventional training in art. Since his advent in America about eight years ago, he has followed his own course with much freedom. He acknowledges no other influence in his art than that of Niccolo Pisano, the great master of the thirteenth century.

Yone Noguchi, whose latest literary effort is the book called "Through the Torii," has made several lecture tours through the United States.

By SOSEKI NATSUME.

(Translated by a Japanese Schoolboy.)

NOW, by the everlasting wayside, I shall describe the frontispiece of the servants girls in the house. The face are just simply puffed up matter.

Recently someone presented to us without his regards a paper lantern made after style of globe fish from the Anamori Inari and our serbant goll's face are puffed up just exactly like as that.

The degree in fact are so extreme and both eyes are lost in that puffness. Globe fish are round all over and puffed according, but the serbant goil have many angles to her face and all those angles have their own perticular muscle literally.

In fact it may be descrived as moistened hexagon clock. Supposing the slavey gets wise to what I am descriving, she will be the maddest she can be. So here I leave her now to return to my puerile master so fond.

He are puffing up his face with all air he can command to come into his mouth, as I described before, and he slapped his own cheek and soliloquized to himself in thus wise:

"When the skin are extended thusly, the pockmark do not appear to show, seemingly."

Now he faces sideway and let the ray of light shine on the one side of his face which she saw in the mirror.

UBIQUITOUS POCKMARKS.

"The pockmark seem to get so conspicuous thisaway. After all are said and done, when I face the light straightly, they show more evenly. That are some funny," say he, as though he would have all men believe he are greatly impressed upon the change. Now he stretched his hand as far as he seemed to could and took the looking glass to far distance and quietly gazed himself into it.

"With this distance between my face and the looking glass, it don't seem to look so affected," he peruse. "Everything are that way," he remit, as though he are getting himself to be wery wise. Next he made the mirrow sideways suddenly and now he coax everything to come together at the foot of nose, eyes, foreheads and eyeblows made a sidestep toward that perticular place as the center. It looked so bad and ugry.

"This won't never do," proclaim he, and returned the diffrunt organ of his face to the proper places.

"Can't understand why my face seem so fiendish," he contemplate, and make himself look puzzled like and brung the glass to about the three inch station from his face. Then he rubbed the fourfinger on the tips of nose and then he brung it down to the blotter paper on table and press it so hard on the paper.

I saw the round impiession of a grease on the blotter paper. He sure do know many a trick, my fine dear master. Now he took that finger to lower eyelid and turned it out like a kid. I are not sure whether he's making the studdy on pockmark or just are making a staring match in competition with looking glasses.

LIKE A CHAMELEON.

He seem to intertain a changeable mood and try to accomplish diffrunt thing as he get at it. The human studdy beging with studdy of one self. Heaven and the earth, cielo e mar, mountain and river, the sun, the moon, the star, the Milky Way, the whole planet system, are all one to oneself, only they go by the diffrunt name.

There are nothing else as the subject of studdy outside of oneself. Suppose anyone were to be able to make a jump out of oneself, there won't be any more of that personality left or remaining. But now no one can seem to do the study of oneself outside or beyond the pale of oneself.

Howeverso one feel so kindly to other and wish for that study to other or wish to be study by other, it can't somehow be did. Therefore, ebery hero of a bygone days became a little tin hero all of his own.

The looking glass are some sort of an instrument whereby one make oneself wery selfconceited but at the same time it can act as a disinfectant to wanity. Suppose one contemporate at oneself in a fullness of wanity, we cannot hardly measure to what extent it will instigate one's wanity. For the time gone by, about the two-thirds of incidents brought about by the conceit are caused by mirror. Hang 'em all sezzi..

AN UNHAPPY MEMORY.

At time of a french revolution a doctar inwented a new machine to be applied in gently executing criminals out of this life, which of course do not give a wery pleasant aspect of memory to the inwentor, although from all I have been able to learn he meant wery well indeed, so it should give the bad memoir to the inwentor of mirror so-called.

But when one gets himself depressed extremely or when he considers himself so small, why it are best to look within mirror. Then you'll discober you've got the great nerve to walk street all puffed up as though she are a great man.

This revelation I have discobered are so important in regard to one's public life. It are great if one appreciate his own littleness. Every other smart man are in duty bound to pay homage to this self-awakening man.

But master so fervid are not wise enough to get himself wise at his own foolishness with the aid of mirror. Nevertheless he can read the pockmarks on his own face impartially. The self-rewelation on the ugliness of his own face will be a step forward to the comprete understanding of the abismal darkness of his own mind. He have a future and hope. This may be counted as to the good effect of the severe lecture he received from the filosofer.

BLISSFUL IGNORANCE.

I have been thus contemperating the master so beautiful, but he didn't know anything about it at all. He has done "wouldn't you like it" to his own satisfaction and remark:

"I see the great congestion of blood in my two eye. After all it are kronick case of conjunctivitis," and now he began to rub the lower eye lids wigorously. I suppose it itch but then it is so congested without rubbing and his rubbing will do lots of harm I'm afraid.

"I imagine soon it will get spoiled like the eye of salted sea bream. Soon afterward he find his eyes in the mirror so dimmed just like the norther sky in winters time in northern country. But then of course his two eye are not so clear from inception.

MORE THIS HERE NEXT SATERDY.